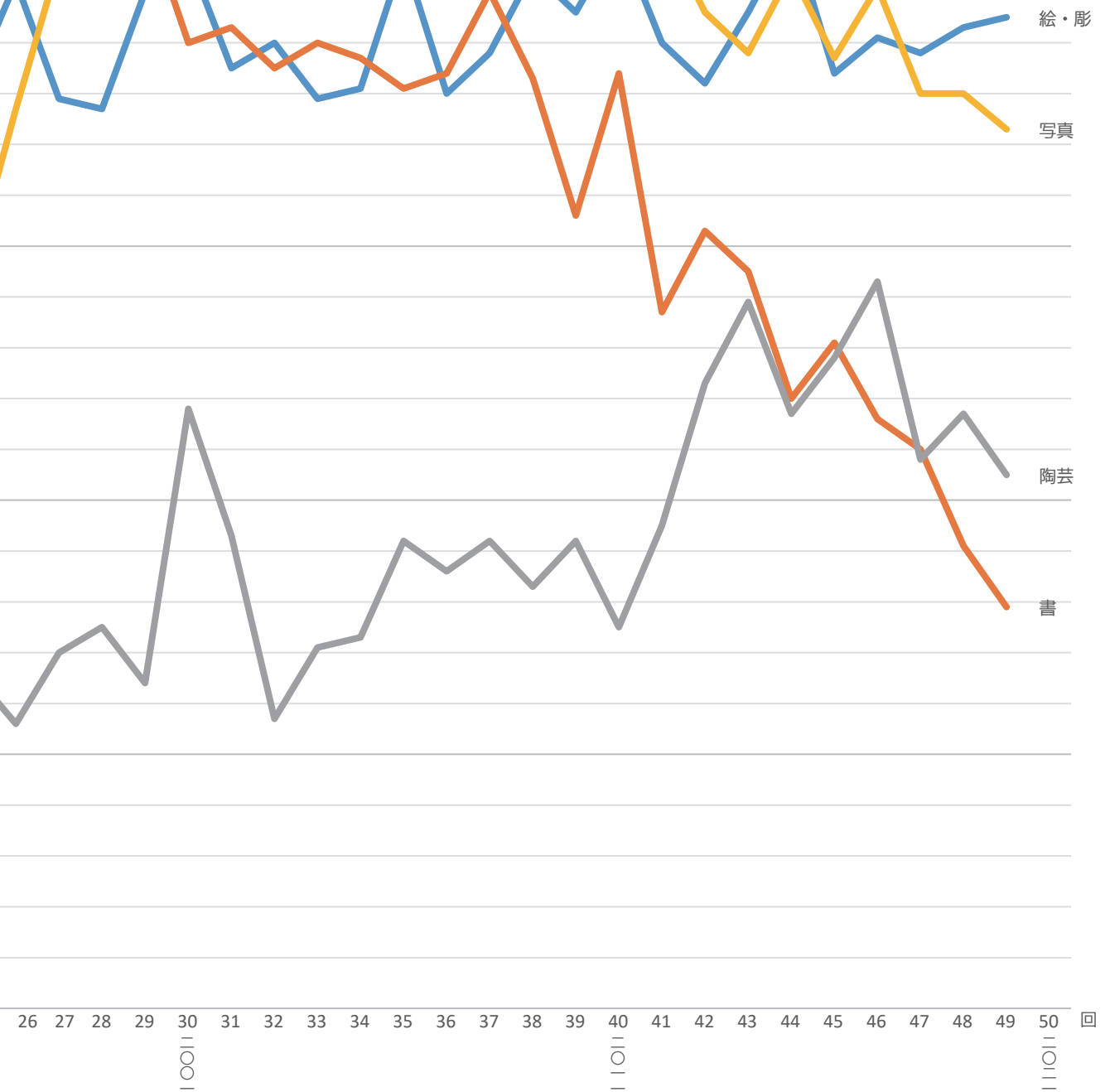


いわき市美展50年の歩み



■応募点数

	絵・彫	書	陶芸	写真	合計
1	152				152
2	114				114
3	130				130
4	123				123
5	171	158			329
6	132	164			296
7	144	154			298
8	(不明)	158			
9	152	161			313
10	157	157			314
11	160	158			318
12	165	154			319
13	171	134			305
14	159	147			306
15	144	143			287
16	181	177			358
17	181	182			363
18	167	182			349
19	169	197			366
20	206	195			401
21	172	190			362
22	183	237			420
23	191	211			402
24	182	207	75	169	633
25	182	195	66	146	589
26	202	278	56	177	713
27	179	252	70	206	707
28	177	205	75	203	660
29	200	215	64	202	681
30	207	190	118	213	728
31	185	193	93	237	708
32	190	185	57	252	684
33	179	190	71	263	703
34	181	187	73	247	688
35	207	181	92	251	731
36	180	184	86	241	691
37	188	200	92	258	738
38	204	183	83	244	714
39	196	156	92	251	695
40	211	184	75	235	705
41	190	137	95	213	635
42	182	153	123	196	654
43	196	145	139	188	668
44	212	120	117	204	653
45	184	131	128	187	630
46	191	116	143	201	651
47	188	110	108	180	586
48	193	91	117	180	581
49	195	79	105	173	552
50					

■内、青少年の応募点数（参考：24回展～）

絵・彫	書	陶芸	写真	合計
15	4	0	1	20
13	7	0	0	20
12	10	0	1	23
13	7	0	1	21
5	3	0	0	8
13	3	3	1	20
5	6	1	1	13
4	4	2	6	16
5	4	1	1	11
0	3	0	1	4
5	4	3	1	13
12	1	2	1	16
9	6	0	1	16
11	8	0	1	20
25	5	0	2	32
7	7	0	0	14
28	9	0	1	38
25	5	0	2	32
20	10	1	0	31
22	11	0	0	33
26	7	1	2	36
16	16	7	3	42
25	6	11	3	45
22	8	23	0	53
24	4	22	11	61
19	2	14	0	35

(※23回展までは記録がないこともあり略す。)

50回記念

いわき市美展50年の歩み

ごあいさつ

このたび、いわき市立美術館では、いわき市民美術展覧会（市美展）の50回を記念して、市美展の50年の歩みを振り返る小冊子を作成するはこびとなりました。

市美展は、昭和46（1971）年に平市民会館を会場に、絵画作品を展示する第1回展が開催され、その後、第5回展からはいわき市文化センターで、第14回展からはいわき市立美術館でと、より広い、展示にふさわしい場所へと会場を移し、開催されてきています。

部門としては、第5回展からは書の部、第10回展からは彫塑の部、第24回展からは陶芸の部と写真の部が増設され、展覧会は質量ともに充実していき、「市民美術展としては近隣に並ぶものがない」と評価する方も少なくありません。近年では、年に一度の美術の祭典として、出品者だけでなく、鑑賞する市民を含めた多くの方々に親しまれています。

市美展は、第1回展の時から市民が運営に主体的に関わってきたのが大きな特徴となっています。より多くの市民の方に本記念誌を手にとっていただき、これまでの歴史を振り返りつつ、市美展の未来のより良い在り方を考えていくのに役立っていただければ幸いです。

なお、紙面の制約のため、各回の審査員の講評および受賞者一覧につきましては、美術館ホームページ上に掲載しております。そちらもあわせてご覧ください。

最後になりましたが、いわき市美展を支えて来られましたすべての方々に改めて深く感謝申し上げます。

2021年2月

いわき市立美術館

※審査員の講評、受賞者一覧

いわき市立美術館ホームページ/刊行物/いわき市美展50年の歩み

いわき市美展50年の歩み

峰丘（絵画・彫塑の部 部会長）

1971年（昭和46年）、平市民会館で第1回が開催された「いわき市美展」が、今年50回を迎えた。開催までの準備等々、ここまで続けてこられたことを諸先輩方の苦労や努力に深く感謝したい。また、文化活動に対しての行政側の協力、企業の協賛にも御礼申し上げたい。市美展は多くの人達の参加協力がなければ出来ない展覧会です。

会場は第4回展までは平市民会館でしたが、第5回展からはいわき市文化センターに移ります。この時から市美展の認知が市民の間に広がったのか、出品者が増加しますが、展示スペースの関係で陳列出来ない作品が出てきました。

第14回展からは市民運動により建てられた美術館での市美展となります。しかし、やはり展示スペースの関係と出品者のサイズが大きくなったこともあり、40回展まで落選者が続きます。絵画・彫塑の部では、多い時で181人の一般応募中、落選が81点という年もありました。

41回展からは展示パネルを増設するなどしてスペースを広げ、44回展を除いて今までのところ落選者はゼロが続いています。

第1回展が152点の一般応募で始まりましたが、最高で212点という年もあり、ここ10年をみても増加傾向にあります。

私は何度か関西や関東で公募展の審査を頼まれましたが、比較するといわきの市美展のレベルは高いと思います。市民美術展が美術館で開催されるというのもあまり聞いたことがありません（県展はいまだに福島市の文化センターで開かれています）。

安井賞展や各種の企画展、有名な收藏品を持つ美術館の存在の影響力は相当なものがあります。私が絵画・彫塑の部の部会長になってから、招待作家による入選作品批評会を企画し、強く思ったことは、次世代の若い作家を育てることでした。それには青少年（特に高校生）の創作意欲の向上を促すため「T S C 青少年奨励賞」、加えて「青少年賞」を設けました。10年ほど前から青少年の応募が急に増えてきて、最近になって上位受賞者

に若者が多くなり、その成果が出て来たのを嬉しく思います。

今、世界中がコロナ禍の中、先の見えない生活が続いています。コロナ後の文化は一体どうなるのか？ 新しい思想や哲学が必要になるのかもしれませんが。心の復興があるとすれば文化しかないという気持ちで、先輩方から受け継いだ「いわき市美展」を通し、地域の文化発展のため仲間達と出来ることは何でもするという気持ちであります。

まずは「いわき市美展50回展」をお祝い申し上げます。

いわき市美展50回展に想う

石川大溪（書の部 部長）

令和3年2月5日から3月14日まで「第50回いわき市民美術展」が開催されることとなった。書の部、絵画・彫塑の部、陶芸の部、写真の部の4部門を3回の会期で終了させるものである。例年と全く違うのは、2019年末ごろから地球上を覆う「新型コロナウイルス」禍の続く中に於いて行われるということだ。

このような不屈の精神に裏打ちされたいわき市民の美術愛好家達と、太平洋戦争後の「現代美術」を標榜する、いわき市立美術館のコレクション——イヴ・クラインを初めとした数多の現代美術家の作品を中核に据え、未知の価値をも内包する美術品の数々——を市民に提供し続けた「いわき市立美術館」は、美術に関わる市民を育んだ偉大な母親であると思ふ。

私は書の世界で生き、成長した市民の一人であるが、「展覧会場」など全く無かった戦時中に生を享け、仙台空襲に向うB29のグオン、ガンガンという音を聴いたのが、私の知り得る最古の音であり、脳内の碑に刻印として残る。

時代は移り、昭和40年、平商業高校が移転し、「市民会館」が建造されたころには戦後も20年が過ぎ、世の中は落ちついて来ていて、「もはや戦後ではない」を合言葉に、市内外の各界の動輪は激しく動き出す。

若松光一郎先生が先導者としてアートの世界を牽引され、昭和46年10月に「第1回いわき市民美術展」が始動した。これは市民による当地に於いての記念すべき出来事だったと思う。

この5年前、昭和41年10月1日、近郷の十四町村を合併して日本最大の面積をもつ「いわき市」が誕生していた。時代が商工業等と共に巨大な弾み車になったということだ。

書に話を戻す。昭和20年代も半ばを過ぎたころ、「書」に対する関心は膨張を続けていた。「読み・書き・算盤」は江戸時代から標語として存在し続け、昭和20年代も終わりに近づく頃は、国民全体が我に返ったように個人の趣味を大切にしようという風潮が、年を追って増幅してゆくのが子

供だった私にも理解できた。

平市民会館、文化センター、と場所を移し、昭和60年の第14回展からは待望のいわき市立美術館での展覧となった。平成3年1月には、市美展20回記念事業として、「中国名家書画文房展」と「歴代招待作家・三賞受賞作品によるいわき市美展20年の歩み展」を美術館といわき市文化センターに分けて展示を行った。

「中国名家……」に関しては、「歴代招待作家……」とは別枠の図録作成することは前年に決定していて、田邊碩聲、川島大桂（石楠）、矢内斉、石川大溪の四人が実行委員としてこの任にあたり、作品の所在、選択、拝借の手順、撮影の立ち合い、部門別の解説などを行った。美術館の学芸員の方々、写真家の上遠野良夫氏などの沢山の人々のご協力のもとに過ごした二か月は、私個人としては宝物のような時間である。はっきりいえるのは、この後数年間が書の部の最盛期であったと私は見る。

爾後、実質的な熱意は急冷の方向を指す。これは、学習指導上の国家の方針転換とも重複し、毛筆を軽視する風潮が急速に広がり、バブル崩壊、IT機器の進化と急速な普及、更に、東日本大震災による大津波と原発のメルトダウンなど、矢継ぎ早に襲う事故と天災なども書の退潮の大きな原因の一つと見ることができる。

今後の書についていえるとすれば、受賞することは大切なことではあるが、より以上に大切なことが山ほどあるということだろう。川の流れは逆行させられないように、世の中の推移や変化は変えることができない。その中に私達は生かされているのだが、書の問題ではなく、人間一人ひとりの覚悟の問題だと思う。

最後になるが、50回記念展の特別事業として、市美展の創設に活躍された佐々木折柴、村上皓南、田久奇峰、縮引千齋の四先生の作品若干を拝借し、陳列する。作品によって大先達の熱情を少しでも汲むことに意を用いて頂くことを心から願う次第である。

市美展50回を迎えて

新谷辰夫（陶芸の部 部長）

市美展としては50回、陶芸の部では27回を迎えます。市美展は初春のいわき市立美術館恒例の行事となっており、市民の美術の発表の場として無くてはならないもの、当然あるべきものとして定着していると思います。

振り返ってみると、平成4年（1992年）10月に「いわき陶芸協会」が百余名で発足し、以降毎年、文化センターを会場として、「いわき陶芸協会展」を催し、会員の発表の場としています。市美展への参加は、初代会長の緑川宏樹氏からの「そろそろ皆さんで市美展に参加しよう」との提案がきっかけでした。

私の記憶では、平成5年（1993年）10月に、同じく新加入を望んでいた写真部門と合同で市美展加入のための準備会を開きました。そこでの協議を受け、市美展に陶芸の部新設を要望する署名活動を行い、市長室と教育長室へ陳情にも行きました。

その時の要望書の内容の一部には次のように陶器について述べています。「……陶器は、私たちの暮らしに欠くことのできないものであり、また永い歴史をもっております。土と炎によって作り出される陶器のなかに、創る人の心情が吹き込まれ、陶器を通じて心が通い合う心の表現であります……」。こうした陶器の魅力は、市民の多くの方から賛同を得られました。

そして、念願の両部門新設が平成6年（1994年）に第24回市美展で実現したのでした。

初回の審査員として、笠間の陶芸家で、陶のインスタレーションによる現代美術の表現も手掛ける、伊藤公象氏をお招きしましたが、その結果、市長賞には、吉田重信氏の「地上に堕ちた青い天使」が選ばれました（50回記念事業で展示される予定ですのでご覧ください）。この作品は、これまでの伝統的な焼物という概念にとらわれていなく、こうした陶芸作品もあるということを知らせてくれる、市民へのプレゼントだったのではないのでしょうか。

なお、審査をしていただいた伊藤公象氏の作品

は、美術館1階ロビー南側に設置されており、ガラス越しにいつでも見られます。

それから回を重ね、27回目を迎えますが、毎回審査員を変えて行っています。笠間、益子、会津本郷焼、大堀相馬焼、東京など各地から様々な手法をとられる人、また、伝統的な器を作られる方から陶による現代美術的表現を手掛ける人など、審査員のタイプは幅広くなっています。審査員は一人なので、その方の主観が審査に反映されますが、審査員が変わっても何回も賞を取る方がおり、それはその方の持てる力の表れだと思います。

私は審査時に作品運搬等でお手伝いしていますが、その時に感じることは、タイトル、名前、できれば年齢まで、審査員が見たければ見られるように、分かりやすく提示しておいてもいいのではないかと思います。審査員の方が作品の下に隠された出品票を取り出し、タイトルを見て「ハーン」と頷いたり、年齢を聞いてビックリしたりすることもありますので。

今後の市美展陶芸の部についてですが、招待作家の中には「もう一度審査を受け、賞を取りたい」との声があります。審査を受ける緊張感があつた方が、制作のモチベーションが上がるということでしょうか。これについては一案なのですが、三賞の受賞を重ねて4ポイントをとって招待作家となられた方については、招待としての作品展示は3年までとし、その後は一般出品の立場に戻り審査を受ける、という方法もあるのではないかと思います。そうすれば、また明日への創作意欲が湧くのではないのでしょうか。ただし、この案は決定したものではありません。

市美展の意義は、陶芸をしている人も、それを鑑賞して下さる方も、このすばらしいいわき市立美術館の中で、作品と雰囲気味わえる時間と空間を持てることではないのでしょうか。こうした環境を創っていただいていることに感謝です。

50回展に寄せて

永山淳（写真の部 部会長）

いわき市民美術展に写真の部が生まれた背景としては、性能が良い手ごろなカメラが普及し、写真人口が大幅に増え、通常の記念写真ばかりではなく、風景、民族、祭り等を被写体に、写真表現を手掛けるアマチュアカメラマンと呼ばれる人たちが育っていったことがある。彼らは仲間を集めてそれぞれカメラクラブを結成し、グループで展覧会を行っていた。そして、そうした複数のクラブのメンバーたちが、クラブの枠を超えて一堂に会した展覧会を望むようになり、市美展への参加の聲が高まり、写真の部新設への署名運動を市内各地で行った。その結果、平成7年3月に、第24回市美展において初めて写真の部が開催されることになった。

最初の部会員には、各クラブの代表者や有力者などが集まった。今井蓮水氏が部会長となり、山口忠重氏と上遠野良夫氏とともに指導的な立場として会をまとめた。この三人は無鑑査作家として出品した。部会員は一般応募の受付、展示作業等を行った。写真の部第1回目は、慣れないので混乱も予想されたが、全てスムーズに進行し、混乱はなかった。一般応募者はひとり1点の決まりで、169点の応募があり、初めての募集としては大成功であった。

その後、毎年微増し、第33回展の応募点数263点を頂点に減少に転じ、近年は200点前後を維持している。

市美展には招待作家の枠を設けている。これは、市長賞2点、議長賞1点、教育長賞1点として、合計4点を獲得すれば、次回展からは招待作家となる制度である（※なお、実績が評価されて招待となる人もいる）。写真の部では、これまで26回開催してきているが、この制度により招待になったのは、上遠野真人氏と吉田精利氏の2名のみである。二人とも人物の写真で市長賞を取り、招待になったと記憶している。

写真の部では、他の部と比べて招待作家の数が圧倒的に少ない。この原因は何故か。写真とは広い視界の中から一部分を切り取るもので、その表現する内容の視覚的な良し悪しが判断されるものである。私の場合を言うと、とにかく写真として成り立つ被写体を求めて、あちらに花が咲いたと

聞けばそちらに行き、こちらに祭りがあればそこに行き、目的の定まらない写真を撮り続けてきた。その結果は市長賞をとれず、惨敗を繰り返している。

余談はともかく、写真の部の入賞確率はおよそ十分の一で、10人に1人は入賞する。その中で、上位三賞に入り4点を獲得したのは上記の二人だけなのである。写真を撮ることは簡単である。現在のカメラは、特にデジタルカメラは使いやすく、便利に出来ているため、誰でも簡単に撮影でき、傑作が撮れる可能性が高い。しかし入賞するのは簡単ではない。表現の内容の良し悪しで入賞かどうかの当落が決まるが、選者に訴える力があるかが問題で、選者の眼に止まらない限り入賞はない。

例えば、風景写真の撮影では、風景そのものも大事だが、気象条件によって変化する被写体の様子を捉え、普段と異なる写真を作品として作ることが肝心である。簡単に言えば、自然は同じ様子を繰り返さないから、入賞を目指すには他の人が撮らないアングルや、シャッターチャンスを見逃さないことが重要である。あるいは、主役と脇役の活かし方を考え、普段と変わった表現をするなど工夫しなくてはいけない。

さて、これまでの市美展において問題になったことについて触れたい。第1回目の市長賞受賞作品は、写真であるのか、あるいはアート作品であり写真とは認めがたいものであるのか、などと部会員の間で問題となった。それは写真をパソコンで加工して仕上げたものとして見られ、意見が割れたことを記憶している。第50回記念事業で展示されるので、みなさんはどのようにご覧になるだろうか。その他に、入賞した写真が、他のコンテストで入賞した写真とほぼ同じで、連続シャッターで撮影した写真だということが後で分かったケースなどがあった。

最後になりますが、市民の皆様、カメラマンの皆様、今流行の新型コロナウィルスに負けることなく、活躍されることをお祈りいたします。また、市美展にご協賛いただいている各社の皆様には、ご支援に感謝申し上げます。そして、部会員の皆様、毎年、市美展のためにご尽力いただき、ありがとうございます。部会員のボランティア精神によって市美展は成立していると思っています。これからも一緒に頑張りましょう。

いわき市民美術展覧会について

杉浦友治（美術館副館長）

第1回いわき市民美術展覧会（市美展）が開催されることになった経緯について、当時、いわき美術協会副会長であった菱沼儀は、「数年前から陳情を続けてきた結果、念願が達成された」ということを述べている（註1）。市美展は、行政や教育委員会からの要請で始まったのではなく、その最初の成り立ちからして、市民が主体的に関わって生まれたのである。

この市民が運営に主体的に関わる点が市美展の大きな柱となっている。現在、会場となっている美術館は事務局を務めているが、基本的に市美展は、各部の市民の代表者からなる運営委員会が審査員や予算など運営に関することを決める。

そしてその下部組織には絵画・彫塑、書、陶芸、写真の各部会があり、そこに属する部会員が、作品受付や陳列作業やネームプレートの作成など、現場での実務的な仕事を担っている。部会員はまた運営面でも様々な提案等をする（※運営委員会は部会で決まったことを尊重している）。彼らは無報酬でこれらの仕事を意欲的に務めるが、こうした市民の芸術文化に寄せる熱意が市美展を動かし、毎年毎年繰り返され、50年も続いている。まずは、このことについて敬意を表したい。そして、市民のこうした熱いエネルギーは、文化センターを建てる署名活動となり、また、美術館建設運動に繋がっていったのである。

では、市美展の主な特徴について挙げていきたい。一つ目として、開かれた民主主義的な運営がされている点である。各部の部会員については、部会員の推薦があって部会で承認されれば、基本的に誰でもが部会員になることができる。運営委員についても同様で、部会で推薦があれば、その決定は原則として尊重される。

部会や運営委員会では様々なことを決めていくが、誰かが独断で決めるというのではなく、みんなで協議し、少数意見にも耳を傾け、意見が分かれる時には、最終的には多数決で決める姿勢をとってきている（註2）。こうした姿勢があるからこそ、組織として淀むことなく、活性化した状態を保つことができているのであろう。

開かれた性格ということでは、公募作品の受け

入れについても言えよう。スペースの都合等のため、作品募集要項で作品の規格が定められているが、各部会においてしばしば、これまでの見慣れた作品の枠をはみ出すような表現が出てきた時に、どこまで受け入れるかが問題となる。展示室の環境に悪影響を及ぼすものや不法なものはダメだが、また、部会の中で賛否が分かれる時もあるが、たいていの場合、まずは表現の多様性を受け入れる方向で進んできている。市美展の大きな特徴として各部において出品内容がバラエティに富んでいることがあるが、それはこうした開かれた姿勢が基本にあるためであろう。

二つ目の特徴としては、応募作品を未発表の創作作品に限って、多くの出品者がここぞとばかりに力を入れた新作を出品することである。戦後のいわきの美術界をリードし、長く絵画・彫塑の部会長を務めた若松光一郎は、『いわき市美展20年の歩み展』のカタログの中で、「地方の美術文化水準を多少なりとも向上を目指すには、各自が率先して出品作に全力を傾倒すること」（註3）が大事であると述べている。こうした「市美展スピリット」とでも呼びたい姿勢は、切磋琢磨となり、年々、作品の質が向上していくことに繋がっている。これは市美展を継続していく上でもっとも大事なことであろう。

三つ目としては、審査員を市外から招き、一人の方に責任もって審査してもらう点である。市外の人ならば、地元の間人関係に煩わされずに公平に審査できる。一人で審査するという事は、審査には主観が入るので、審査員が変われば審査結果も変わることを受け入れることを意味する。つまり、10人の審査員が個別に審査すれば10通りの審査結果になる。それは見方を変えれば、毎年、審査員が変わるのであれば、複数年のスパんでみれば、いろいろな人が受賞できるチャンスが広がるということである。また、時には誰もが予想しなかった作品が市長賞を受賞するなど、尖がった審査結果になることもあるだろう。そうした一面が部会員に支持され、市美展のユニークさにも繋がっている。

ただ、このやり方の是非については部会内にも様々な意見があり、複数名の審査の方がいいのではないかと事務局に意見が寄せられることもある。実際、書の部では第46回展までは市内の書家複数名による合議制で審査をしていた。今後もこ

の件については各部会で議題となり、協議されることになるだろう。

四つ目としては、美術館で開催されていることである。1984年に美術館が開館してからは、企画展の時にはピカソなどの巨匠の作品が展示されることもある、企画展示室が会場になっている。それまでの文化センターの天井の低い場所から、天井高のある広々とした空間に変わり、また、展示されるのが美術館ということもあって、応募作品は増え、より意欲的な、力の入った作品が出品されるようになった。

そのことは規格の上限の縦350cmもある大きな作品などが出品される絵画・彫塑の部で分かりやすいが、他の部門においても、例えば写真の部でいえば、各自が所属するサークルのグループ展で出品しているものとは、大きさやプリントの質が違おうし、入賞を狙うかのような意気込みが感じられるのである。ある人たちにとっては、年に一度、美術館が決戦の舞台になるかのようなのである。また、別のある人たちにとっては、他者と競うというよりも、神社のお祭りで神さまを喜ばすために神楽の技芸を磨くかのように、自分のベストを尽くそうとし、魂のレベルから表現する。こうした出品者の意欲の高さが市美展のクオリティを高め、活力に満ちたものにする。

ビギナーや、ふだん創作活動をしていない人にとっては、美術館で展示されることを喜びに出品する人がいるなど、美術愛好家の裾野を広げる面においても、会場が美術館という舞台は大きな効力を発揮しているように思われる。

五つ目としては、協力者や協賛者だけでなく、美術ファンなど市民に広く支えられている点である。近年では、佳作賞の副賞としてご協賛くださる会社などが35件以上ある。その中には7口もご協賛くださる法人もあれば、協賛制度を取り入れた第2回展以降ずっとご協賛くださっている会社もある。また、昨今の厳しい経済情勢の中、30年以上続けてご協賛くださる小さなお店もある。

事務局として協賛金を預かりに彼らに会い、「今年も楽しみにしています」と声をかけられる時などには、市美展が市民に深く愛されていることに改めて気づかされる。そのことは展覧会を見に来られる人たちの楽しげな様子からもうかがえる。市美展は作り手だけでなく、支援者や多くの美術ファンにとって、言わば年に一度の美術の「祭典」

として親しまれているのである。

主な特徴について述べたが、これらの特徴等に付随する魅力が多く市民を惹きつけ、最盛期には一般応募が4部門で700点を超えるほどあった。また、各部で出品歴のある人而言えば、24回から49回展までの記録だが、絵画・彫塑で約1300人、書で約1000人、陶芸で約700人、写真で約1000人を数えた。合計すると、25年の間だけでも約4000人の方が市美展に出品した経験を持つ。このように活況を呈する市美展には、これまで「市民美術展としては近隣に比べるものがないほど充実している」との声が寄せられている。市美展がいわきの美術の裾野を広げ、文化の担い手を育てるなど、文化振興の面で大きな役割を果たしてきたことは高く評価されるべきである。

最後に、市美展の今後の課題の一つについて触れておきたい。近年どの部門でも問題となってきたが、それは部会員や出品者が高齢化してきているので、若い世代の人を市美展に引き込むことである。ただ、このことはすでに30年前に書の部で、当時の佐々木折柴部会長が問題として指摘していたが（註4）、同部では一般応募の点数は、高齢化が進んだことにより、一番多かった時に比べると三分の一にまで減少してきているように、簡単なことではないかも知れない。

これからますます高齢化と人口減少化が進んでいくので、50回を節目に事務局をはじめ部会員や運営委員など、関係者みんなが今まで以上に知恵を出し合い、考えていかなければいけない課題となっている。これを読んでいただいた方には、身近な若い人に市美展への出品を勧めていただくご協力をお願い申し上げたい。

（註）

- 1、菱沼儀「第1回いわき市民美術展覧会について」（いわき美術協会員に市美展への出品を呼び掛ける文書）
- 2、各回の部会等において議題となった主なことについては、本冊子13ページ以降のいわき市美展の歩みを参照。
- 3、若松光一郎「いわき市民美術展に就いて」（本冊子58ページを参照）
- 4、佐々木折柴「15年を振り返って」（本冊子59ページを参照）



13回展 運営委員会



13回展 会場作り (絵彫, 文化センター)



13回展 搬入受付 (絵彫)



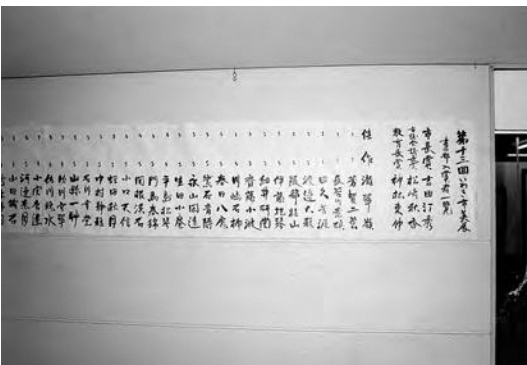
13回展 審査 (絵彫)



13回展 テープカット (絵彫)



13回展 展示作業 (書)



13回展 受賞者名掲示 (書)



13回展 会場風景 (書)



19回展 会場風景（書，美術館）



19回展 会場風景（書）



19回展 会場風景（絵彫）



19回展 会場風景（絵彫）



19回展 会場風景（絵彫）



20回記念 中国名家書画文房展会場風景



20回記念 市美展20年の歩み展（書，文化センター）



20回展 記念パーティー（書）



34回展 作品批評会（絵彫）



37回展 審査員による講評（陶芸）



37回展 審査員による講評（写真）



37回展 表彰式（陶芸写真）



38回展 テープカット



38回展 作品批評会（絵彫）



38回展 会場風景（陶芸）



38回展 会場風景（写真）



38回展 会場風景（写真）



38回展 表彰式（書）



44回展 呈茶会（陶芸）



45回展 作品解説会（書）



45回展 揮毫会（書）



47回展 会場風景（陶芸）



47回展 呈茶会（陶芸）



47回展 タッチコーナー（陶芸）



47回展 会場風景 (写真)



47回展 作品説明会 (写真)



48回展 高校生による書道パフォーマンス (書)



48回展 呈茶会 (陶芸)



49回展 賞状作成 (書)



49回展 搬入受付 (絵彫)



49回展 展示レイアウト (絵彫)



49回展 キャプション置き (絵彫)

いわき市美展の歩み

【第1回展】

- 会期 昭和46（1971）年
10月12日（火）～10月15日（金）
- 会場 平市民会館
- 主催 いわき市教育委員会 いわき市文化団体
連絡協議会
- 後援 福島民報社 福島民友新聞社 いわき民
報社 NHKいわき放送局 福島テレビ 福島
中央テレビ ラジオ福島 （財）福島県報徳社
- （絵画の部）
審査員：角 浩（新制作協会会員）
一般応募：152点（129人）
展示点数：164点（一般152点、招待12点）
（日本画19点 洋画145点）
三賞受賞者〔①は市長賞、②は議長賞、③は教
育長賞を意味する（以下同様）〕：
①上野武夫「風景」
②天野 和「漁港の印象（2）」
③箱崎節子「秋」
※佳作13点

[◇以下に、主な記録等について、最初に全体に
関係するもの、次に各部に關係するものの順番で
記す。各部の表記は（絵、彫）などと略す。]

- ◇第1回展から第4回展までは絵画のみで開催。
第1部日本画、第2部洋画の2部門に分けられ、
第3回展までは各部一人2点まで出品できた。
- ・招待作家は12人。
- ・出品規定では、サイズは6～100号。
- ・出品作品は未発表の創作に限ることが明文化さ
れている。これは現在も同じ。
- ・審査員を市外で活躍する方ひとりのみとする方
式は、第1回展から現在まで変わらない。（ただし、
書の部は第5回展から第46回展まで複数の招待作
家による合議制で審査した。）

【第2回展】

- 会期 昭和47（1972）年

10月27日（金）～10月30日（月）

- 会場 平市民会館
- 主催、後援は第1回展と同じ
- （絵画の部）
審査員：鳥居敏文（独立美術協会会員）
一般応募：114点（95人）
展示点数：126点（一般114点、招待12点）
（日本画6点 洋画120点）
三賞受賞者：
①鈴木邦夫「漁船B」
②林 昭生「城山からの展望」
③北郷喜三郎「補修」
※佳作15点

◇展覧会への協賛の申し出があり、新たに佳作に
社名を入れた副賞をつけることになる。佳作に社
名を入れるのは現在も続いており、出品目録など
に明記される。

- ・招待作家について見直しがなされ、県展招待者
など、新たに阿部セキ、坂本勇、吉田富美の3名
が招待作家となる。

【第3回展】

- 会期 昭和48（1973）年
10月6日（土）～10月10日（水）
- 会場 平市民会館
- 主催、後援は第1回展と同じ
- （絵画の部）
審査員：田中春弥（一水会会員）
一般応募：130点（118人）
展示点数：147点（一般130点、招待16点、遺作
展示1点）
（日本画16点 洋画131点）
三賞受賞者：
①中村亨司「炭礦の想い出」
②藤田政明「作品喜」
③伊沢賢一「船」
※佳作15点

◇新たに北郷喜三郎、佐藤英吉、鈴木邦夫、広沢
栄太郎の4名が招待作家となったが、広沢は展覧
会開催の2か月前に亡くなり、遺作展示となる。

・いわきの日本画界を代表する中西一路は、この年脳溢血で倒れ、この回が招待作家として最後の出品となった。

【第4回展】

■会期 昭和49（1974）年

10月9日（水）～10月13日（日）

■会場 平市民会館

■主催、後援は第1回展と同じ

■（絵画の部）

審査員：中谷 泰（東京藝術大学教授、春陽会会員）

一般応募：123点（123人）

展示点数：142点（一般123点、招待19点）

三賞受賞者：

- ①今野峯生「船骨」
 - ②蛭田 誠「工場」
 - ③阿部好伸「雪の山」
- ※佳作15点

◇第4回展から1部門ひとり1点までの出品に変更となる（現在も同じ）。限りある展示スペースをより有効に活用し、ひとりでも多くの市民が参加できるようにとの理由による。

・伊沢賢一と中村亨司が招待作家となる。

【第5回展】

■会期 昭和50（1975）年

10月10日（金）～10月16日（木）

■会場 いわき市文化センター

■主催 いわき市教育委員会 いわき市文化団体連絡協議会 いわき美術協会 いわき市立文化会館

■後援は第1回展と同じ

■絵画の部

審査員：杉全 直（東京藝術大学講師）

一般応募：171点

展示点数：148点（入選131点、招待17点）

三賞受賞者：

- ①蛭田 誠「タンクの見える風景」
- ②藤田政明「75—峡—No. 4」

③広瀬 論「漁村風景」

※佳作15点

■書の部

審査員：佐々木折柴（長）、田久奇峰、村上皓南、
綿引千斎

[※（長）は審査長を意味する]

一般応募：158点

展示点数：168点（一般158点、招待10点）

三賞受賞者：

- ①雅楽川一睡「呉昌碩尺牘」
 - ②石川大湊「六言二句」
 - ③田辺碩声「受知」
- ※佳作15点

◇昭和50年5月にいわき市文化センターが開館し、市美展は第5回展から第13回展まで同所で開催されることになる。この年、「書の部」が新設された。また、従来第1部日本画、第2部洋画と分かれていたのを「絵画の部」のひとつに統一し、2部門でそれぞれに審査するという形式になる。この回のみ、両部門同時開催であった。

・主催にいわき美術協会といわき市立文化会館が加わる。

・「いわき市立文化会館」とは、いわき市文化センターに属して種々の文化事業を開催する事務局であり、第9回展まで主催者事務局を務める。

・この回以降、招待作家については、中央での活躍の顕著な作家もしくは県展の委嘱・招待作家であるという従来の条件に加えて、市長賞は2ポイント、議長賞と教育長賞は1ポイントとし、合計4ポイントを獲得した作家も招待の資格を得ることになる（新設の書の部がシステム化し、絵画の部がこれになった）。なお、最終的には各回の運営委員会で承認されて正式に招待作家となる。

・この回から、市長賞受賞作品は市で買い上げることになる。

（絵）若松光一郎が部会長となり、第25回展まで務める。

・スペースの都合等のため、40点の作品が落選となる。

（書）書の部創設においては、県展の招待作家であった佐々木折柴、村上皓南、綿引千斎、田久奇峰の4名が、作品寸法7,200cm²以内などの規格を決めるなど、世話人的役割を果たした。

- ・佐々木折柴が部会長となり、第44回展まで部会長を務める。
- ・招待作家は10人で県展の招待作家と委嘱作家からなった。
- ・審査員は上記の県展招待作家4名で、審査長を佐々木折柴が務める。招待作家複数名の合議制による審査方法は、第46回展まで続けられる。

【第6回展】

- 会期 昭和51(1976)年
 絵画の部 10月1日(金)～10月7日(木)
 書の部 10月9日(土)～10月15日(金)

■会場 いわき市文化センター

■主催、後援は第5回展と同じ

■絵画の部

- 審査員：萩原英雄(日本版画協会会員)
 一般応募：132点
 展示点数：148点(一般132点、招待16点)
 三賞受賞者：
 ①橋本 弘「やまの跡」
 ②松田信三「航跡は消された」
 ③湖月健太郎「風景(スペインにて)」
 ※佳作15点

■書の部

- 審査員：後藤桂仙(長)、石川葎、小野寺峰堂、
 鈴木胡秀、田辺追牛、酒井泰舟
 一般応募：164点
 展示点数：174点(一般164点、招待10点)
 三賞受賞者：
 ①田辺碩声「甲骨文」
 ②石川大濑「五言二句」
 ③村上三蛾「華魁」
 ※佳作18点

◇会場の都合により、絵画の部、書の部の会期が分かれる。

・この年、いわき美術協会と並んで市民の美術運動の中心となる「いわき市民ギャラリー」が設立される。

(絵) 審査員の萩原英雄が「額装は高い、安いの問題ではなく、絵に最もマッチしたものが最良で、額も絵の重要な一部であることに留意してほし

い」と、額装への無関心について出品目録の講評で指摘している。ただし、出品規定に「幅3cm以内の仮椽額装」が条件としてうたわれていて、そうならざるをえない一面がある。この条件はひとつには薄くすることによって1点でも多く作品を入選させるための配慮から、ふたつめには、作品自体のみで審査をしてもらおうとの意図からである。

(書) 審査員は前回展の4人を除いた残りの6人の招待作家が務める。ちなみに第7～8回展では3人の招待作家が審査をし、第9回展から第46回展までは原則として招待作家4人体制で審査を行う。

【第7回展】

- 会期 昭和52(1977)年
 絵画の部 9月30日(金)～10月6日(木)
 書の部 10月9日(日)～10月15日(土)

■会場 いわき市文化センター

■主催、後援は第5回展と同じ

■絵画の部

- 審査員：吉井 忠(主体美術協会会員)
 一般応募：144点
 展示点数：127点(入選113点、招待14点)
 三賞受賞者：

- ①高杉和久「Double Reflections」
 ②天野和雄「青の印象」
 ③渡辺文雄「解体倉庫」
 ※佳作15点

■書の部

- 審査員：村上皓南(長)、綿引千斎、石川大濑
 一般応募：154点
 展示点数：165点(一般154点、招待11点)
 三賞受賞者：

- ①菅野空谷「五風十雨」
 ②園部秋月「眼明身健」
 ③雅楽川一睡「李太白詩」
 ※佳作18点

【第8回展】

■会期 昭和53(1978)年
絵画の部 9月29日(金)～10月5日(木)
書の部 10月8日(日)～10月14日(土)

■会場 いわき市文化センター
■主催、後援は第5回展と同じ

■絵画の部
審査員：田中忠雄(行動美術協会会員)
展示点数：119点(入選106点、招待13点)
三賞受賞者：

- ①宮田英子「静物」
 - ②天野和雄「青の印象 No. 43」
 - ③今泉木主「球形タンクのある風景」
- ※佳作20点

■書の部
審査員：田久奇峰(長)、佐々木折柴、
田辺碩声
一般応募：158点
展示点数：170点(一般158点、招待12点)
三賞受賞者：

- ①清水桂心「良寛詩」
 - ②矢内 齊「七言絶句」
 - ③芳賀二葉「蘇軾詩」
- ※佳作23点

◇いわき市民ギャラリーが主催した「ヘンリー・ムーア 素描と彫刻展」が、いわき市文化センターで開催され、市民から大きな反響があった。

(絵) 作品サイズの上限が100号から120号に変更となる。これは回数を重ねるにつれ、出品者の展覧会への熱意と意気込みがますます高まり、その強い要望に応じてのことである。

(書) 参加者のレベルに対して賞の数が少ないとの判断から、書の部独自に新たに5つの佳作賞が設けられる。

【第9回展】

■会期 昭和54(1979)年
絵画の部 11月29日(木)～12月5日(水)
書の部 12月8日(土)～12月14日(金)

■会場 いわき市文化センター

■主催、後援は第5回展と同じ

■絵画の部
審査員：大沢昌介(二科会理事)
一般応募：152点
展示点数：114点(入選99点、招待15点)
三賞受賞者：

- ①高橋不二夫「オッターボート」
 - ②渡辺八市「原風景」
 - ③佐藤麗子「部屋」
- ※佳作22点

■書の部
審査員：綿引千斎(長)、酒井泰舟、石川隼、
鈴木胡秀
一般応募：161点
展示点数：174点(一般161点、招待13点)
三賞受賞者：

- ①春日八虎「菊花寿」
 - ②菅野桂洞「車駕肥輕」
 - ③雅楽川一睡「陶淵明詩」
- ※佳作25点

◇これまでの会期とずれ、11月末からの始まりとなる。それはその前に市民ギャラリー主催による「ロダン展」がいわき市文化センターで開催されたため。こうした市民ギャラリーの美術振興への積極的な活動は、市立美術館建設運動を一気に盛り上げた。

(絵) 出品者の間にはより大きい力の入った作品を制作しようとする意欲が高まってきている。一方で、展示空間が限られていることにより、入選作品数を減らさざるをえないという問題を抱え込む。

(書) 佳作賞を前回より2点増やす。

・園部秋月が招待作家となる。

【第10回展】

■会期 昭和55(1980)年
絵画・彫塑の部 10月1日(水)～10月7日(火)
書の部 10月10日(金)～10月16日(木)

■会場 いわき市文化センター

■主催 いわき市民美術展覧会運営委員会 いわき市教育委員会 いわき市文化団体連絡協議会

いわき美術協会 いわき市文化センター

■後援は第5回展と同じ

■絵画・彫塑の部

審査員：難波田龍起（アートクラブ会員）

一般応募：157点

展示点数：126点（入選108点、招待18点）

絵画部門（一般92点、招待16点）

彫塑部門（一般16点、招待2点）

三賞受賞者：

①渡辺文雄「解体船の家」

②宮田英子「室内の静物」

③四家武光「奥会津（針生の里）」

※佳作25点

■書の部

審査員：村上皓南（長）、後藤桂仙、田辺迫牛、
小野寺峰堂

一般応募：157点

展示点数：172点（一般157点、招待15点）

三賞受賞者：

①矢内 齊「唐詩二首」

②菅野桂洞「卓爾起倫」

③滝 翠嶺「陶淵明詩」

※佳作25点、新人賞3点

◇従来の運営方針に次のような重要な変更がなされた。絵画の部に新たに彫塑部門が加えられ、合同の「絵画・彫塑の部」となる。運営方法が、いわき市による直営から、市民の中の指導的な作家たちが運営委員会を組織し、その委員会が市からの補助金、出品手数料、協賛金によって運営するシステムに改められる。現在も同じである。

・主催にいわき市民美術展覧会運営委員会といわき市文化センターが加わる。

・この年、市立美術館建設の要望を受けて、いわき市が建設のための準備室を設置する。現代美術を収集する方針が掲げられ、収集も始められ、翌56年3月から4月にかけて市文化センターで収蔵作品展が開催された。こうした現代美術は市美展出品者たちに影響を与えていく。

・佳作の数は、第10回を記念して、絵画・彫塑の部、書の部でそれぞれ3点ずつ増設される。
（絵、彫）山野辺日出男、舟生厚、北郷悟の3人が招待作家となる。

（書）清水桂心が招待作家となる。

・レベル的に中間に位置する出品者たちへの励ましとして、新たに「新人賞」を3枠設ける。同賞はこれまで一度も受賞したことのない出品者を対象とする。

【第10回いわき市民美術展覧会選抜展】

■会期 昭和55（1980）年

10月22日（水）～10月26日（日）

■会場 植田公民館

■主催、後援は第10回展と同じ

展示点数：103点（絵画・彫塑の部51点、書の部52点）

内訳：

絵画部門 入選作より29点（受賞作20点）、招待作より15点

彫塑部門 入選作より5点（受賞作2点）、招待作2点

書部門 入選作より37点（受賞作31点）、招待作15点

◇第10回を記念して選抜展が植田公民館で開催された。

【第11回展】

■会期 昭和56（1981）年

絵画・彫塑の部 10月1日（木）～10月7日（水）

書の部 10月10日（土）～10月16日（金）

■会場 いわき市文化センター

■主催、後援は第10回展と同じ

■絵画・彫塑の部

審査員：萩 太郎（新制作協会会員）

一般応募：160点

展示点数：154点（入選135点、招待19点）

絵画部門（一般113点、招待17点）

彫塑部門（一般22点、招待2点）

三賞受賞者：

①湖月健太郎「風景（公園のある街）」

②松原邦子「月と人形」

③高杉和久「海想譜」

※佳作25点

■書の部

審査員：田久奇峰（長）、石川大濠、田辺碩声、
清水桂心

一般応募：158点

展示点数：173点（一般158点、招待15点）

三賞受賞者：

- ①荒井東苑「遠山」
- ②滝 翠嶺「陶淵明詩」
- ③菅野桂洞「静寂養和」

※佳作25点、努力賞1点、明星賞1点、新人賞1点

◇（絵、彫）出品作がますます拡大化の傾向にある。スペースの都合上、落選を出すことで対応してきたが、入選作品を増やすために応募作品のサイズの上限を120号から100号に小さくする。しかしながら、文化センターの展示場が手狭であることには変わりはなく、将来建設される市立美術館で開催してほしいという声があがりはじめる。

（書）前回から設けられた新人賞は、今回は1点のみであるが、代わりに「努力賞」と「明星賞」が各1点ずつ設けられる。

【第12回展】

■会期 昭和57（1982）年

絵画・彫塑の部 9月30日（木）～10月6日（水）

書の部 10月9日（土）～10月15日（金）

■会場 いわき市文化センター

■主催は第10回展と同じ

■後援 いわき民報社 福島民報社 福島民友新聞社 福島テレビ 福島中央テレビ NHKいわき放送局 ラジオ福島 福島放送（財）福島県報徳社

■絵画・彫塑の部

審査員：野見山暁治（前東京藝術大学教授）

一般応募：165点

展示点数：144点（入選125点、招待18点、遺作展示1点）

絵画部門（一般110点、招待16点、遺作展示1点）

彫塑部門（一般15点、招待2点）

三賞受賞者：

- ①根本裕之「防波堤への道」

②天野和雄「青の印象 No. 63」

③渡辺文雄「スクラップ置場」

※佳作25点

■書の部

審査員：佐々木折柴（長）、綿引千斎、石川律、
雅楽川一睡

一般応募：154点

展示点数：170点（一般154点、招待16点）

三賞受賞者：

- ①菅野桂洞「愛其静」
- ②矢内 齊「華清宮二首」
- ③芳賀二葉「杜甫詩」

※佳作25点、新人賞3点、

◇後援に福島放送が加わる。

・昭和59年4月に開館が決定した市立美術館での市美展開催が、より積極的に検討された。

（絵、彫）前回展でサイズの上限を100号までに縮小して入選点数の増加をはかったが、上限いっばいの大ききで出品する作家たちが増え続け、入選作品は昨年より10点減少する。

・招待作家の遠藤正三が亡くなられ、遺作展示が行われる。

（書）県展等での実績が認められて、荒井東苑が招待作家となる。

・前回展で設けた「努力賞」、「明星賞」の名称をやめ、代わりに第10回展と同様「新人賞」を3点とする。

【第13回展】

■会期 昭和58（1983）年

絵画・彫塑の部 9月29日（木）～10月5日（水）

書の部 10月8日（土）～10月14日（金）

■会場 いわき市文化センター

■主催、後援は第12回展と同じ

■絵画・彫塑の部

審査員：佐野ぬい（女子美術大学教授、新制作協会会員）

一般応募：171点

展示点数：133点（入選117点、招待15点、遺作展示1点）

絵画部門（一般105点、招待13点、遺作展示1点）

彫塑部門（一般12点、招待2点）

三賞受賞者：

①高杉和久「黒の海景 83—4」

②石川貞治「ムカシムカシ……」

③佐藤麗子「死にすぎている水」

※佳作25点

■書の部

審査員：村上皓南（長）、後藤桂仙、田辺追牛、鈴木胡秀

一般応募：134点

展示点数：151点（一般134点、招待17点）

三賞受賞者：

①吉田汀秀「孟浩然詩」

②松崎秋香「袁宏道詩」

③神林東伸「柳湖来農夫」

※佳作28点

◇（絵、彫）応募数がこれまでで最高となったが、各出品作の巨大化により、入選点数は前回よりも8点減少する。

・招待作家の佐藤英吉が亡くなられ、遺作展示が行われる。

（書）菅野桂洞と矢内齊がポイントを重ね招待作家となる。

【第14回展】

■会期 昭和60（1985）年

書の部 1月24日（木）～2月3日（日）

絵画・彫塑の部 2月9日（土）～2月20日（水）

■会場 いわき市立美術館

■主催 いわき市民美術展覧会運営委員会 いわき市教育委員会 いわき市文化団体連絡協議会
いわき美術協会 いわき市立美術館

■後援 （財）福島県報徳社 いわき民報社
福島民報社 福島民友新聞社 福島テレビ
NHKいわき放送局 ラジオ福島 福島放送
テレビユー福島

■書の部

審査員：綿引千斎（長）、酒井泰舟、小野寺峰堂、清水桂心

一般応募：147点

展示点数：165点（一般147点、招待18点）

三賞受賞者：

①滝 翠嶺「陶淵明詩」

②芳賀二葉「溝口桂巖詩」

③吉田汀秀「揚衡詩」

※佳作29点

■絵画・彫塑の部

審査員：村井正誠

一般応募：159点

展示点数：131点（入選114点、招待17点）

絵画部門（一般105点、招待15点）

彫塑部門（一般9点、招待2点）

三賞受賞者：

①鬼頭貞彦「港」

②塩 長一「坑口に見える風景」

③今野峯生「海から……」

※佳作25点

◇第14回展から、昭和59年4月に開館した市立美術館が会場になる。

・例年、秋の市民文化祭の時期に開催していたが、第14回展から冬の1月末以降に開催する会期となる。

・両部門の開催順序が書の部 → 絵画・彫塑の部の順に変更となる。ただし、この順番は固定ではなく、第31回展以降、変更がある。

・文化センターの代わりに美術館が主催に入り、事務窓口になる。

・後援にテレビユー福島が加わる。

（絵、彫）美術館での開催で会場が広がったため、一般応募作品・招待作品のサイズの上限を100号から120号に大きくする。

・美術館に展示されるということもあって、大きいサイズの作品が増えたため、当初の予想よりも多くの作品が落選となる。

・前回展で招待に昇格するためのポイントを獲得していた高杉和久が、絵画・彫塑の部としては初めて、得点制によって招待作家となる。一方で、天野和雄と渡辺文雄も同様の資格を得ていたが、招待作家数を抑えて入選点数を増加させることが検討されていたために、招待への推薦は次回以降に見送られた。

・美術館で「安井賞展」が継続して開催されることになり、今後、同展に影響を受けたと思われる作品が出品されるようになる。

・審査を不服とする作家たちによる「落選展」が近くのギャラリーで開催された。

【第15回展】

■会期 昭和61(1986)年

書の部 1月23日(木)～2月2日(日)

絵画・彫塑の部 2月6日(木)～2月16日(日)

■会場 いわき市立美術館

■主催は第14回展と同じ

■後援 (財)福島県報徳社 いわき民報社
福島民報社 福島民友新聞社 福島テレビ
NHKいわき放送局 ラジオ福島 福島放送
テレビユー福島 福島中央テレビ

■書の部

審査員：田久奇峰(長)、園部秋月、田辺碩声

一般応募：143点

展示点数：160点(一般143点、招待17点)

三賞受賞者：

- ①神林東伸「山中独居」
- ②吉田汀秀「王建詩」
- ③長谷川素碩「元好問詩」

※佳作29点

■絵画・彫塑の部

審査員：渡辺恂三(新制作協会会員)

一般応募：144点

展示点数：117点(入選101点、招待16点)

絵画部門(一般89点、招待14点)

彫塑部門(一般12点、招待2点)

三賞受賞者：

- ①峰丘「中央高原のM夫人」
- ②舟生 孝「セプトレ」
- ③渡辺尋志「音子」

※佳作25点

◇後援に福島中央テレビが加わる。

(書)昨年に引き続き160点台の展示点数で、スペースに余裕があるため、次回以降、応募者増に力を入れることになる。

・滝翠嶺がポイントを重ね招待作家となる。

(絵、彫)絵画部門の入選数は過去最低となる。それは規定の上限いっぱいのサイズの作品に意欲的に取り組んでいる出品者が多いためである。喜

ばしいことではあるが、一方で展示スペースは限られており、ますます落選の作品を出さざるをえなくなってきた。

・日展、光風会展に出品している石井實が、実績等が認められ招待作家となる。

【第16回展】

■会期 昭和62(1987)年

書の部 1月30日(金)～2月11日(水)

絵画・彫塑の部 2月18日(水)～3月1日(日)

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援は第15回展と同じ

■書の部

審査員：佐々木折柴(長)、後藤桂仙、雅楽川一睡、
菅野桂洞

一般応募：177点

展示点数：197点(一般177点、招待20点)

三賞受賞者：

- ①神林東伸「駕奔車」
- ②芳賀二葉「宋之問詩」
- ③芦川雪舫「七言絶句」

※佳作29点、奨励賞1点、新人賞1点

■絵画・彫塑の部

審査員：田中稔之(行動美術協会会員)

一般応募：181点

展示点数：121点(入選100点、招待21点)

絵画部門(一般85点、招待18点)

彫塑部門(一般15点、招待3点)

三賞受賞者：

- ①上遠野 敏「日だまりのハーモニイⅡ」
- ②吉田昭男「工場」
- ③吉田重信「CRACK '87」

※佳作25点

◇出品手数料を会期延長、諸経費値上げに伴って、一般の部を従来の800円から1000円にする。

(書)積極的な募集が功を奏し、一般応募が177点となり、昨年より34点増加する。

・吉田汀秀がポイントを重ね招待作家となる。

・出品者への励み、また、若手作家の育成として、奨励賞と新人賞が設けられる。奨励賞は、今までに一度も賞を受賞したことのない出品者、新人賞

は30歳未満の出品者に限定した賞である。

・作品の規格は、縦長8尺までを認める規定に変更する。

(絵、彫) プロとして活動している峰丘(春陽会会員)と緑川宏樹(走泥社同人)、および既にポイントが4得点以上獲得していた渡辺文雄と天野和雄の4名が新たに招待作家となる。

・一般応募が181点あり、落選は81点だった。招待作品のサイズの上限を100号に抑えたが、落選者を減らす点では大きな効果は生み出さなかった。落選者の割合が高すぎる点と、入・落選のボーダーラインにいる作家たちが増えている点が解決すべき重要な問題として検討されはじめる。

【第17回展】

■会期 昭和63(1988)年

書の部 1月30日(土)～2月11日(木)

絵画・彫塑の部 2月17日(水)～2月28日(日)

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援は第15回展と同じ

■書の部

審査員：村上皓南(長)、田辺追牛、石川葎、
荒井東苑

一般応募：182点

展示点数：204点(一般182点、招待22点)

三賞受賞者：

- ①松崎秋香「送晋侯作」
- ②川嶋石楠「顔延年詩」
- ③大河原一酔「龍門無宿客」

※佳作29点、奨励賞1点、新人賞2点

■絵画・彫塑の部

審査員：大沼英夫(東京藝術大学教授、国画会
委員)

一般応募：181点

展示点数：148点(入選129点、招待19点)

絵画部門(一般117点、招待16点)

彫塑部門(一般12点、招待3点)

三賞受賞者：

- ①石川 進「TERRAへの伝言」
- ②吉田重信「チカクテキ・ジッタイ」
- ③渡辺和也「街」

※佳作25点

◇(書) 県展委嘱の田久芳涯と、ポイントを重ねた神林東伸と芳賀二葉の3名が招待作家となる。

・展示スペースにゆとりがあるため、応募作品の増加を図っていたが、今回初めて展示総数が200点を超える。

(絵、彫) 第16回展終了後、入選点数の増加を主目的とした部会を数度開催し、最終的に解決策としてロビーに特別展示パネルを設置することによって、展示点数の増加に対応することになった。新しく作成されたパネルの製作費の半分は、当時教育委員長を勤めていた小名浜海陸運送株式会社社長大塚静義氏からの寄贈でまかなわれた。その結果、特に落選者を多く出していた絵画部門で、30点の入選増となった。

・作品の規格は、横長は現状のまま、縦の長さについては、天井まで高さ5mの展示場を有効に使えるように、縦3m程度まで上限を広げる。

【第18回展】

■会期 平成元(1989)年

書の部 1月28日(土)～2月9日(木)

絵画・彫塑の部 2月15日(水)～2月26日(日)

■会場 いわき市立美術館

■主催は第15回展と同じ

■後援 (財)福島県報徳社 いわき民報社
福島民報社 福島民友新聞社 福島テレビ
NHK福島放送局いわき支局 ラジオ福島
福島放送 テレビユー福島 福島中央テレビ

■書の部

審査員：綿引千斎(長)、酒井泰舟、石川大湊、
滝翠嶺

一般応募：182点

展示点数：204点(一般182点、招待22点)

三賞受賞者：

- ①渡邊大雅「澹然」
- ②斎藤柳史「山下晚晴」
- ③長谷川素碩「梅堯臣詩」

※佳作29点、奨励賞1点、新人賞2点

■絵画・彫塑の部

審査員：絹谷幸二(東京藝術大学講師、独立美術協会会員)

一般応募：167点

展示点数：150点（入選129点、招待21点）

絵画部門（一般114点、招待18点）

彫塑部門（一般15点、招待3点）

三賞受賞者：

①石川 進「水辺にて（デボン紀）」

②吉田重信「LEBEN（生命）」

③会田光子「躍動」

※佳作25点

◇運営委員会において第20回記念事業について検討していくことになった。

（書）観覧者の鑑賞と理解の一助とするため、出品作品の釈文一覧を作成し、展示場内で自由に閲覧できるようにする。好評で、現在も続けられている。

（絵、彫）前回展からロビーに展示パネルを設置し、より多くの作品を展示できるようにしたが、壁面の関係で38点の選外を出すことになった。審査員の絹谷幸二は審査講評の中で「惜しくも選外となった作品の中にも、ごく自然な形で想いのだけが表現されている好ましい作品も沢山ありました。」とコメントしている。

【第19回展】

■会期 平成2（1990）年

書の部 1月27日（土）～2月7日（水）

絵画・彫塑の部 2月15日（木）～2月25日（日）

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援は第18回展と同じ

■書の部

審査員：田久奇峰（長）、清水桂心、矢内齊、
神林東伸

一般応募：197点（内、青少年6点）

展示点数：221点（一般197点、招待24点）

三賞受賞者：

①芦川雪舫「早歸」

②渡邊大雅「群鳳」

③長谷川素碩「梅堯臣詩」

※佳作29点、奨励賞1点、新人賞2点

■絵画・彫塑の部

審査員：宮崎 進（多摩美術大学教授）

一般応募：169点

展示点数：153点（入選135点、招待18点）

絵画部門（一般113点、招待16点）

彫塑部門（一般22点、招待2点）

三賞受賞者：

①梅津幸三「十二支折紙シリーズ（午）乗馬」

②藤於 環「カミが大地に帰るとき」

③吉田成寿「Atmosphere」

※佳作25点

◇次年度、20回記念展を文化センターで同時開催し、記念カタログを発行することとなり、企画小委員会を設け内容を検討していくことになる。

（書）県展委嘱の川嶋石楠が招待作家となる。

・応募作品が前回よりも17点増え、中でも、「かな」の出品者が近年増加したこともあり、スペースの都合上、横長の作品が初めて二段掛けの展示となる。

・諸作業を担当する書の部部会員の見直しははかられ、今回から招待作家のみで作業を進めることになる。作業の全体量は招待作家の人数だけでできることであり、招待ではない人が諸作業に参加することによって、彼らの作品への審査がやりづらくないようというのが主な理由である。

（絵、彫）2人の招待作家が「未発表の新作に限る」という規定をたびたび守っていないため、また、過去数年間において未出品のため、招待作家から外される。

・作品の規格で高さの上限を3.5mと正式に定める。議長賞の作品は、この高さを有効に活かした作品で、その後も高さを活かした作品が出品されるようになる。

【第20回展】

■会期 平成3（1991）年

書の部 1月25日（金）～2月5日（火）

絵画・彫塑の部 2月10日（日）～2月21日（木）

■会場 いわき市立美術館

いわき市文化センター

■主催 いわき市民美術展覧会運営委員会 いわき市教育委員会 いわき市文化団体連絡協議会
いわき美術協会 いわき市立美術館 いわき市文化センター

■後援は第18回展と同じ

■書の部

審査員：佐々木折柴（長）、村上皓南、田久奇峰、
綿引千斎

一般応募：195点（内、青少年7点）

展示点数：218点（一般195点、招待23点）

三賞受賞者：

①松崎秋香「傳山詩」

②齊藤王寧「登浮碧樓」

③渡辺大雅「秉彝」

※佳作29点、奨励賞7点、新人賞4点

■絵画・彫塑の部

審査員：江見絹子（行動美術協会会員）

一般応募：206点（内、絵画部門で青少年23点）

展示点数：154点（入選135点、招待19点）

絵画部門（一般117点、招待16点）

彫塑部門（一般18点、招待3点）

三賞受賞者：

①藤於 環「次代への供物」

②渡辺 啓「美神たち」

③加藤孝子「シルバーシート」

※佳作25点

◇20回を機に一般の出品料を1000円から1500円にする。

（書）招待作家の作品は、スペースの都合もあり、文化センターで開催された「いわき市美展20年の歩み展」のなかで展示された。

【第20回記念事業】

■中国名家書画文房展

会期 1月25日（金）～2月5日（火）

会場 いわき市立美術館 企画展示室1

■歴代招待作品・三賞受賞作品による いわき市美展20年の歩み展

■会場 いわき市文化センター

■書の部

会期 1月30日（水）～2月5日（火）

■絵画・彫塑の部

会期 2月10日（日）～2月16日（土）

◇第20回記念事業のために、両部門の代表11名に

よる第20回記念展合同企画委員会を平成2年5月と6月に開催したほか、部門別の特別部会や運営委員会などを開催し、内容等を固めていった。そして、市美展の歩みをたどる「歴代招待作品・三賞受賞作品による いわき市美展20年の歩み展」を市文化センターで開催し、図録を作成した。これは歴代の招待作家および三賞受賞者から一人1点、市美展出品作を展示するのが主な内容で、市美展の歴史を振り返り、検証しようとした。

さらに、書の部では、20回記念事業として、公募展と同会期で美術館企画展示室1を用いて、書文化の啓蒙を目的に「中国名家書画文房展」を開催した。これは清代のものを中心とした、書蹟、絵画、文房四宝、諸具など約450点の展示によって、詩書画三位一体を重視した中国の文人のころを紹介しようとしたものである。同展は書の部の招待作家の石川大湊、川嶋石楠、田辺碩声、矢内齊の4名が実行委員として作品調査、選定、作品解説、撮影など関わり、中心になって進めた。出品物は市内の所蔵家からご協力をいただいた。

こうした20回記念事業は約150社にのぼる地元企業から協賛をいただくことで実現した。協賛は各部の部会員が積極的に活動し集めた。

また、両部門で出品歴者および協賛者などに声をかけ、20回記念パーティーがそれぞれ開催され、関係者の交流がはかられた。

【第21回展】

■会期 平成4（1992）年

書の部 2月1日（土）～2月12日（水）

絵画・彫塑の部 2月16日（日）～2月27日（木）

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援は第18回展と同じ

■書の部

審査員：村上皓南（長）、後藤桂仙、鈴木胡秀、
芳賀二葉

一般応募：190点（内、青少年3点）

展示点数：214点（一般190点、招待24点）

三賞受賞者：

①谷津彤雲「和王逸賓繁臺詩」

②高久香扇「吳昌碩詩」

③江尻蒼逕「衆如蜂聚」

※佳作29点、努力賞3点、新人賞2点

■絵画・彫塑の部

審査員：奥谷 博（独立美術協会会員）

一般応募：172点（絵159点、彫13点、※内、絵画部門で青少年18点）

展示点数：150点（入選133点、招待2点・無鑑査15点）

絵画部門（一般120点、招待2点、無鑑査12点）

彫塑部門（一般13点、無鑑査3点）

三賞受賞者：

①広瀬 論「実験室（'92—1）」

②宮田英子「カサブランカのある風景」

③根本武雄「無常」

※佳作25点

美術館長賞 渡辺文雄「鉄路」

◇運営委員会で、陶芸や写真の新部門開設の可能性について協議した。その結果、それらの表現活動をしている人たちが新部門開設への自発的で積極的なまとまった動きが認められてから、その是非について検討することが確認された。

（書）松崎秋香と渡辺大雅がポイントを重ね招待作家となる。

・これまでの奨励賞は努力賞と名称を変える。また、若手育成のための新人賞は、三十歳以下の出品者を対象とし、受賞は三回までとすることになる。

（絵、彫）20回展を終えた後、招待作家の意欲の低下等が問題視され、市美展のよりよい姿を探るために、招待作家による検討会議が2回（平成3年4月13日、6月8日）開催された。その結果、次のようになった。招待作家を改編し、招待と無鑑査の二つに分ける。招待は、若松光一郎と吉田富美の2名で、残りは無鑑査作家とする。無鑑査作家の出品作については、美術館がいわき市立美術館長賞をひとつ選ぶ。無鑑査作家としての活動実績がみんなに認められると運営委員会で招待作家に推薦される。一般応募者については、今後は市長賞などを受賞しポイントを4点獲得すると、無鑑査作家に推薦される資格を得る。

・立体作品の多様化する形態に柔軟に対応していくためもあり、規格を従来の「等身大以内、1×1.5m以内、150kg以内」から次のように変更した。「床占有面積は4平方メートル以内、高さは350cm

以内、重さは300kg以内で手動可能なもの」。

・インスタレーション的な作品に対応するため、壁面と床を同時に使用する作品についての規定を追加し、壁面から突き出る長さは150cm以内とした。

【第22回展】

■会期 平成5（1993）年

書の部 2月5日（金）～2月14日（日）

絵画・彫塑の部 2月19日（金）～2月28日（日）

■会場 いわき市立美術館

■主催は第18回展と同じ

■後援（財）福島県報徳社 福島民報社

福島民友新聞社 いわき民報社 福島テレビ

NHKいわき支局 ラジオ福島 福島放送

テレビユー福島 福島中央テレビ

■書の部

審査員：綿引千斎（長）、田邊迫牛、石川律、田久芳涯

一般応募：237点

展示点数：262点（一般237点、招待23点、遺作展示1点、特別出品1点）

三賞受賞者：

①金賀香楓「元好問詩」

②谷津彤雲「河上立春」

③高久香扇「呉昌碩詩」

※佳作29点、努力賞4点、新人賞2点

■絵画・彫塑の部

審査員：島田章三（国画会会員）

一般応募：183点（内、絵画部門で青少年24点）

展示点数：164点（入選142点、招待2点・無鑑査19点、遺作展示1点）

絵画部門（一般123点、招待2点、無鑑査16点、遺作展示1点）

彫塑部門（一般19点、無鑑査3点）

三賞受賞者：

①柳内憲治「漁港」

②安藤栄作「降りてくる空気」

③鬼頭貞彦「港」

※佳作25点

美術館長賞 峰丘「緋の国から来たM婦人—B—」

◇今回展から各部とも、金曜日はじまりで日曜日に終わる9日間の会期となる。

(書) 一般応募が昨年より48点増と大幅に増える。

・一般の部におけるいわき市長の出品作については、書の部の判断として特別出品ということで扱われた。

・招待作家の清水桂心が亡くなられ、遺作展示が行われる。

(絵、彫) 広瀬論と宮田英子がポイントを重ね招待作家となる。

・招待作家の熊坂太郎が亡くなられ、遺作展示が行われる。

【第23回展】

■会期 平成6(1994)年

書の部 2月4日(金)～2月13日(日)

絵画・彫塑の部 2月18日(金)～2月27日(日)

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援は第22回展と同じ。

■書の部

審査員：村上皓南(長)、小野寺峰堂、菅野桂洞、
吉田汀秀

一般応募：211点

展示点数：235点(一般211点、招待24点)

三賞受賞者：

①齋藤柳史「謝公亭」

②永山閑遠「妍英弄芳意」

③金賀香楓「李白詩」

※佳作29点、努力賞4点、新人賞2点

■絵画・彫塑の部

審査員：麻田 浩(新制作協会会員)

一般応募：191点(内、絵画部門で青少年22点)

展示点数：159点(入選140点、招待2点、無鑑査17点)

絵画部門(一般120点、招待2点、無鑑査14点)

彫塑部門(一般20点、無鑑査3点)

三賞受賞者：

①石田讓介「時の船」

②安藤栄作「空気の間にある形」

③柳内憲治「漁港」

※佳作25点

美術館長賞 石井實「萌」

◇平成4年に市内の陶芸サークルや陶芸家によるいわき陶芸協会(会長：緑川宏樹)が発足し、平成5年3月には、約100名の出品者によるいわき陶芸協会創立記念展がいわき市文化センターで開催された。同協会はいわき市民美術展覧会に陶芸部門を新設することの陳情書を、平成5年秋にいわき市長に提出した。

写真の方では、市内の写真サークルや写真家らが中心となり、「いわき写真愛好市民の会」が結成され、いわき市民美術展覧会に写真の部を新設することの陳情書を、平成5年秋に約4000名の署名簿を添付していわき市長に提出した。

10月20日に開催された市美展運営委員会では、来年度以降における陶芸、写真の部門を新設することを支持した。

こうした状況や、両部門において市美展を運営していくうえでの組織上の問題が特に見当たらないことや、全国の市民美術展において両部門が設置されている所が多いことなどもあり、また、なによりも市の文化振興上、両部門を新設することが意義深いと考えられることから、来年度以降、美術館を会場にして3月上旬頃の同時期に、陶芸と写真の部が実施されることになった。

【第24回展】

■会期 平成7(1995)年

書の部 2月10日(金)～2月19日(日)

絵画・彫塑の部 2月24日(金)～3月5日(日)

陶芸の部 3月10日(金)～3月19日(日)

写真の部 3月10日(金)～3月19日(日)

■会場 いわき市立美術館

■主催 いわき市民美術展覧会運営委員会 いわき市教育委員会 いわき市文化団体連絡協議会 いわき市立美術館

■後援は第22回展と同じ

■協力 いわき美術協会 いわき書道協会 いわき陶芸協会

■書の部

審査員：田久奇峰(長)、酒井泰舟、田辺碩声、
園部秋月

一般応募：207点(内、青少年4点)

展示点数：231点(一般207点、招待23点、特別

出品1点)

三賞受賞者:

①齊藤王寧「杜甫詩」

②江尻蒼逵「画有六法」

③細井研堂「こがらし」

※佳作29点、努力賞3点、新人賞2点

■絵画・彫塑の部

審査員: 櫃田伸也(新制作協会会員、愛知県立芸術大学助教授)

一般応募: 182点(内、青少年15点)

展示点数: 159点(入選139点、招待2点、無鑑査17点、特別出品1点)

絵画部門: 134点(一般117点、招待2点、無鑑査14点、特別出品1点)

彫塑部門: 25点(一般22点、無鑑査3点)

三賞受賞者:

①木村健治「教会のある街の天使」

②村松甚一「廃缶の蒼園」

③高野正晃「BLOWIN' IN THE WIND」

※佳作25点

美術館長賞 舟生厚「Pause」

■陶芸の部

審査員: 伊藤公象(女子美術大学芸術学部教授)

一般応募: 75点

展示点数: 83点(一般75点、招待6点、特別出品2点)

三賞受賞者:

①吉田重信「地上に墮ちた青い天使」

②坪内亜希子「てんとう虫小物入」

③井上征子「花器」

※佳作7点

■写真の部

審査員: 鈴木 清(写真家)

一般応募: 169点(内、青少年1点)

展示点数: 172点(一般169点、無鑑査3点)

三賞受賞者:

①柴田 茂「MIRAGE」

②高萩英男「湯の宿にて」

③石川 暉「いわき 1951」

※佳作18点

◇陶芸の部と写真の部が新たに設けられた。陶芸の部では緑川宏樹が部会長になり、第26回展まで務める。写真の部は今井速水が部会長になり、第

34回展まで務める。両部門とも部会員は、各サークルの代表者や作家などで構成された。

規格は、陶芸の部では、器的な作品は「床占有面積60×60cm以内。(セット作品は1セット1点とする)」、オブジェ的な作品は「床占有面積100×100cm、高さ350cm以内とし、手動可能なもの」とした。基本的には現在も同様である。

写真の部の規格は、単写真は「106×106cm以内の枠の中に四つ切以上の作品」で、組み写真は「106×106cm以内の枠の中におさまり、使用枚数、個々のサイズについては任意」とした。

両部とも展覧会業務には慣れていて、搬入、展示等の運営面では大きな問題はなかった。また、土曜・日曜には解説当番をおき、陶芸や写真文化の普及に努めるなど、部会員の生き生きとして積極的な働きぶりが新鮮で、市美展への意気込みが感じられた。

・今回から、いわき美術協会は主催から協力をまわり、いわき書道協会といわき陶芸協会が協力に加わった。

(書) 20代、30代の出品者が少なく、年々、高齢化していくことや、師の作風の範囲内で終わっている作品が少なくないことが部会で問題視された。

(絵、彫) 武蔵野美術大学教授を務めた稲川敏之が定年で退官し、いわきに戻ってくるにあたり、市美展への参加を呼び掛けたところ、今回は特別出品という形での参加となった。

(陶) 絵画・彫塑の部で受賞を重ねている吉田重信が、オブジェ的な作品で市長賞を受賞する。

(写) 第1回目の審査員には、いわき出身ということもあり、写真家の鈴木清が選ばれた。

【第25回展】

■会期 平成8(1996)年

書の部 2月9日(金)～2月18日(日)

絵画・彫塑の部 2月23日(金)～3月3日(日)

陶芸の部 3月8日(金)～3月17日(日)

写真の部 3月8日(金)～3月17日(日)

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第24回展と同じ。

■書の部

審査員：佐々木折柴（長）、滝翠嶺、神林東伸、川島大佳（※川嶋石楠と同一人物）
一般応募：195点（内、青少年7点）
展示点数：220点（一般195点、招待23点、遺作展示1点、特別出品1点）

三賞受賞者：

- ①馬目香楊「八言二句」
- ②細井清子「夕映え」
- ③谷津彤雲「白居易詩」

※佳作29点、努力賞4点、新人賞3点

■ 絵画・彫塑の部

審査員：相原求一郎（新制作協会会員）
一般応募：182点（内、青少年13点）
展示点数：172点（入選152点、招待1点、無鑑査17点、特別出品2点）
絵画部門：146点（一般129点、招待1点、無鑑査14点、特別出品2点）
彫塑部門：26点（一般23点、無鑑査3点）

三賞受賞者：

- ①鈴木朋子「青の瞬間」
- ②鈴木博之「断層Ⅱ」
- ③吉田昭男「のこされた風景」

※佳作25点

美術館長賞 稲川敏之「無明の人々」

■ 陶芸の部

審査員：宗像亮一（宗像窯七代目）
一般応募：66点
展示点数：70点（一般66点、招待4点）
三賞受賞者：

- ①伊達義道「灰釉鉢」
- ②森 大岳「縄文裂器『自然』」
- ③太田 太「面取壺」

※佳作7点

■ 写真の部

審査員：中村正也（日本写真家協会会長）
一般応募：146点
展示点数：149点（一般146点、無鑑査3点）
三賞受賞者：
①森 大岳「生死流轉」
②安濃榮一「潭秋」
③大森房子「ひととき」
※佳作17点

◇（書）部会において師弟関係と作品の在り方等

について問題提起がなされ、それぞれが高い意識を持って取り組むことが確認された。

（絵、彫）第1回展から市美展を牽引してきた若松光一郎部会長が運営委員会後に亡くなられ、遺作展示が行われた。吉田富美が部会長代行を、北郷喜三郎が部会長代行代理を務めた。

・武蔵野美術大学教授を退官していわきに戻ってきた稲川敏之（二紀会会員）は実績等が認められ無鑑査作家となる。

（陶）青木一男が亡くなられ、また本多博史が辞退したことにより、陶芸の部創設に関わった二人の招待作家が抜ける。

（写）市長賞受賞の森大岳は、陶芸の部では議長賞を受賞した。前回展の陶芸の部で市長賞を受賞した吉田重信など、両部門が新設されてから複数の部門に出品する人が増えてきている。いわき市において創作に励む人の裾野が広がっていくことのあらわれでもあろう。

【第26回展】

■ 会期 平成9（1997）年

書の部 2月7日（金）～2月16日（日）

絵画・彫塑の部 2月21日（金）～3月2日（日）

陶芸の部 3月7日（金）～3月16日（日）

写真の部 3月7日（金）～3月16日（日）

■ 会場 いわき市立美術館

■ 主催、後援、協力は第24回展と同じ

■ 書の部

審査員：村上皓南（長）、後藤桂仙、荒井東苑、松崎秋香

一般応募：278点（内、青少年10点）

展示点数：302点（一般278点、招待23点、特別出品1点）

三賞受賞者：

- ①永山閑遠「摺義献之規」
- ②斎藤柳史「張籍詩」
- ③高野 晶「白居易詩」

※佳作30点、努力賞4点、新人賞3点

■ 絵画・彫塑の部

審査員：佐々木 豊（国画会会員）

一般応募：202点（内、青少年12点）

展示点数：182点（入選162点、招待2点、無鑑

査18点)

絵画部門：160点（一般142点、招待2点、無鑑査16点）

彫塑部門：22点（一般20点、無鑑査2点）

三賞受賞者：

- ①九頭見友行「蓄積」
- ②高野正晃「空が笑った」
- ③吉田昭男「のこされた風景97-1」

※佳作25点

美術館長賞 塩田清忠「陰97-II」

■陶芸の部

審査員：鳥羽克昌（走泥社同人）

一般応募：56点

展示点数：60点（一般56点、招待4点）

三賞受賞者：

- ①星 尚子「遊97-II」
- ②根本寿恵子「花器」
- ③井上征子「壺」

※佳作7点

■写真の部

審査員：竹内敏信（日本写真家協会会員）

一般応募：177点（内、青少年1点）

展示点数：180点（一般177点、無鑑査3点）

三賞受賞者：

- ①薄 宗康「浮漂Ⅲ」
- ②石川 暉「金毘羅祭りの日（1952年2月）」
- ③荻野保夫「幻想」

※佳作17点

◇（書）昨年より一般応募の点数が83点増え、300点を超える作品が会場いっぱい展示された。

・谷津彤雲がポイントを重ね招待作家となる。

（絵、彫）北郷喜三郎（いわき美術協会会長）が部会長となり、また実績等により運営委員会で推挙され招待作家となる。

・次回以降の市美展をより良くしていくために、今後、会期最終日に反省会（部会）を開催することになる（反省会は第27回展以降、陶芸や写真の部門でも開催されるようになる）。反省会では、例年30～40点程度出ている落選を出すことの是非等について協議された。落選については、「一度落選すると次から出品しなくなる」、「市民美術展なのだから美術の裾野を広げるためにも落選はない方がよい」、「応募の全作品が展示できるように

規格のサイズを小さくした方がいい」との意見がある一方で、「落選があったから競争が働き、市美展のレベルが高くなった」、「大きい作品に挑戦できるのはいわきの市美展の大きな特徴なので、規格は小さくしない方がよい」、「現実的にスペースが足りない」などの意見が出され、現段階では現状のままで進めることになった。

（陶）一般応募が昨年より10点減り、2年連続での減少で、出品者を増やすことが課題となる。

（写）一般応募が昨年より31点増え、初年度なみの応募となる。

【第27回展】

■会期 平成10（1998）年

書の部 2月13日（金）～2月22日（日）

絵画・彫塑の部 2月27日（金）～3月8日（日）

陶芸の部 3月13日（金）～3月22日（日）

写真の部 3月13日（金）～3月22日（日）

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第24回展と同じ

■書の部

審査員：田久高峰（長）、石川大湊、鈴木胡秀、渡邊大雅

一般応募：252点（内、青少年7点）

展示点数：275点（一般252点、招待23点）

三賞受賞者：

- ①高久香扇「呉昌碩詩」
 - ②細井研堂「西行歌六首」
 - ③馬目香楊「七言二句」
- ※佳作30点、努力賞4点、新人賞3点

■絵画・彫塑の部

審査員：内田めぐり（創画会会員・武蔵野美術大学助教授）

一般応募：179点（内、青少年13点）

展示点数：181点（入選160点、招待2点、無鑑査19点）

絵画部門：157点（一般140点、招待2点、無鑑査15点）

彫塑部門：24点（一般20点、無鑑査4点）

三賞受賞者：

- ①安斉重夫「風の惑星」
- ②白玉美穂子「廃景」

③伊藤集三「Eggの中の風景-98」

※佳作25点

美術館長賞 石川進「カンブリアの空」

■陶芸の部

審査員：松尾高明（陶芸家）

一般応募：70点

展示点数：74点（一般70点、招待4点）

三賞受賞者：

①古樫冬子「ハート（ハート）」

②平子タキ子「道」

③和知キミ子「白萩花鉢（ゆめ）」

※佳作7点

■写真の部

審査員：一色一成（写真家）

一般応募：206点（内、青少年1点）

展示点数：209点（一般206点、無鑑査3点）

三賞受賞者：

①高橋勇市「どんと祭」

②野崎弘文「紅の花」

③石川義紀「ふれあい」

※佳作16点

◇これまで各部門の初日にテープカットを行ってきたが、出席者が少ないこともあり、今後は最初の部門の初日に、4部門合同で市美展全体のテープカットを行うことになる。

・前回展の書の部搬入日に担当の部会員が、作業中にドアに指を挟むケガをしたことから、各部門において諸作業に従事する部会員に保険をかけることになる。

（書）齋藤柳史がポイントを重ね招待作家となる。
（絵、彫）猿橋喜一が、実績等が評価され運営委員会で推挙され無鑑査作家となる。

・模写の疑いのある作品の取り扱いについて反省会で問題となる。「模写かどうか判断するのは難しい」、「出品者の良心の問題である」などの意見があったが、結論は出なかった。今後も各自がこのことについて問題意識をもっていくことが確認された。

・近年、「絵画・彫塑の部」という言葉ではおさまりきれない多様な作品が出品されている。その現状に対して反省会で問題となり、受け入れるかどうかといったその取扱いや、部門の名称を「平面・立体の部」と改称することについてさまざま

な意見が出された。部門の名称変更については他の部門との整合性もあり、現在もそのままである。搬入時の受け入れについては、出品者の意思を尊重しつつ、毎年変わる審査員の審査の結果を参考に各回の反省会等で振り返りつつ、最終的には部会長が判断することになった。

（陶）緑川宏樹が健康上の理由で役職を辞退し、新谷辰夫が部会長になり、第44回展まで務める。

・部会において、出品者本人以外の手が入る作品をどのレベルまで認めるかについて問題提起がなされた。その結果、作品を最初から最後まで一人で制作できるのは、窯を持っているプロ等に限定してしまうなどの理由により、出品者一人ひとりの創作に対する意識を高めていくことが確認された。

（写）部会や反省会で、最近出始めてきたデジタル写真の取り扱いについて協議した。写真の本質的な問題を含め、さまざまな意見が出された。デジタル表現を排除する強い意見も出されたが、「中央でも、デジタル写真の扱いが明確になっていないのが現状」とのことである。最終的には、「市民が参加する市美展なのだから、市民の多様な表現が受け入れられるべきであり、市民の幅広い創作意欲を萎えさせる制限など設けない方がよい。現代はあらゆるものがデジタル化されていく時代であり、そうした環境から新しい表現も生まれつつある。フィルム写真をやっている人も、デジタル写真をやっている人も、それぞれに言い分なり考え方がある。そして、市民がいろいろな形で自分の表現を作ろうと懸命になってやっているわけだから、それを尊重すべきである。フィルム写真とデジタル写真とを区別するほど、問題が大きいとは思えない。市民美術展なのだから、気持ちをもっと大きくもってよいのではないか」という考え方に落ち着いた。

【第28回展】

■会期 平成11（1999）年

書の部 2月12日（金）～2月21日（日）

絵画・彫塑の部 2月26日（金）～3月7日（日）

陶芸の部 3月12日（金）～3月21日（日）

写真の部 3月12日（金）～3月21日（日）

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第24回展と同じ

■書の部

審査員：佐々木折柴（長）、石川葎、矢内齊、
芳賀二葉

一般応募：205点（内、青少年3点）

展示点数：229点（一般205点、招待24点）

三賞受賞者：

①細井研堂「西行歌六首」

②江尻蒼逕「慮周藻密」

③及川峰紘「洪昇詩」

※佳作31点

■絵画・彫塑の部

審査員：馬越陽子（独立美術協会会員・女流画家協会委員）

一般応募：177点（内、青少年5点）

展示点数：182点（入選163点、招待2点、無鑑査16点、遺作1点）

絵画部門：155点（一般138点、招待2点、無鑑査14点、遺作1点）

彫塑部門：27点（一般25点、無鑑査2点）

三賞受賞者：

①野島美穂「超懲蝶」

②吉田成寿「玄黄記」

③安斉重夫「なかま」

※佳作24点

美術館長賞 広瀬諭「実験室 '99-2」

■陶芸の部

審査員：寺本 守（日本工芸会正会員）

一般応募：75点

展示点数：79点（一般75点、招待4点）

三賞受賞者：

①星 尚子「陶舞衣99-Ⅱ」

②中島 亨「波」

③平子貞男「窯変壺」

※佳作7点

■写真の部

審査員：上野千鶴子（日本写真家協会会員）

一般応募：203点

展示点数：206点（一般203点、無鑑査3点）

三賞受賞者：

①早坂公男「風樹」

②石田友子「春光」

③福地紀男「若竹のよそおい」

※佳作16点

◇（書）高久香扇がポイントを重ね招待作家となる。

・一般応募は昨年に比べ47点減り、出品者の高齢化が進んでいることが問題となる。

（絵、彫）作品の大型化がさらに進んでいる。

・無鑑査作家の猿橋喜一が亡くなれば、遺作展示が行われる。

（陶）出品者本人以外の手が入る作品の扱いについて、昨年に引き続き議論があった。結局のところ、「本人ひとりで完成させた作品しか認めないとすると、窯を持っている人しか出品できなくなってしまう」、「市美展の大きな目的のひとつが市民の創作意欲の向上であり、陶芸愛好者の裾野を広げることがいわきの陶芸の土壌を育てていくことに繋がる」、「高名な審査員の先生は、様々なバランスを見て審査してくれるだろう」などの意見が出され、今の段階で厳密な区別を行うよりも、指導者とともに関々の出品者が育っていくのを温かく見守る方が良いのではないかということになった。「もちろん、自分でできる所は、出来る限り自分でやるのが望ましく、他人を頼ってはいけない。それは良心の問題である」との考え方が大勢を占め、この問題に対しては長い目で見ていくことになった。

【第29回展】

■会期 平成12（2000）年

書の部 2月11日（金）～2月20日（日）

絵画・彫塑の部 2月25日（金）～3月5日（日）

陶芸の部 3月10日（金）～3月19日（日）

写真の部 3月10日（金）～3月19日（日）

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第24回展と同じ

■書の部

審査員：村上皓南（長）、小野寺峰堂、吉田汀秀、
田久芳涯

一般応募：215点（内、青少年3点）

展示点数：240点（一般215点、招待24点、遺作
展示1点）

三賞受賞者：

- ①馬目香楊「七言対句」
 - ②河邊素月「高啓詩」
 - ③金賀香楓「曹植詩」
- ※佳作31点、生涯現役賞1点

■絵画・彫塑の部

審査員：山本文彦（二紀会常任理事・筑波大学
芸術学系教授）

一般応募：200点（内、青少年13点）

展示点数：192点（入選175点、招待2点、無鑑
査15点）

絵画部門：168点（一般153点、招待2点、無鑑
査13点）

彫塑部門：24点（一般22点、無鑑査2点）

三賞受賞者：

- ①鷺 邦明「作品0-0-2」
- ②佐藤もと「巢立つ日」
- ③安斉重夫「おあがり！」

※佳作22点

美術館長賞 伊沢賢一「鱸の詩」

■陶芸の部

審査員：村上東市（日本工芸会正会員）

一般応募：64点（内、青少年1点）

展示点数：68点（一般64点、招待4点）

三賞受賞者：

- ①平子貞男「還元焼成花器」
- ②箱崎りえ「びっくばーんⅢ」
- ③水野山翠「ツボ」

※佳作7点

■写真の部

審査員：藤井秀樹（日本写真家協会会員）

一般応募：202点（内、青少年3点）

展示点数：205点（一般202点、無鑑査3点）

三賞受賞者：

- ①大内 勲「砂浜のオブジェ」
- ②緑川貴之「無題」
- ③上遠野真人「Symmetry」

※佳作15点

◇出品目録を手掛かりに出品者と連絡をとり、作品掲載広告の営業活動をする業者が増えてきており、出品者の中から迷惑だとの声が寄せられた。この問題について運営委員会で検討した結果、今後、プライバシー保護のため、出品目録の住所欄は大字程度までの掲載とすることになった。

・来年度が第30回展となることから、記念事業については各部会で検討し、必要があればそのための運営委員会等を開催していくことになる。

（書）細井研堂がポイントを重ね招待作家となる。

・招待作家の綿引千斎が亡くなられ、遺作展示が行われる。

・80歳以上の出品者を対象とした生涯現役賞が設けられる。

（絵、彫）一般応募が23点増え200点となる。入選点数や展示点数が従来に比べ10点ほど多くなり、作品と作品との間隔があまりに狭すぎ、鑑賞しづらいとの意見が反省会が出る。展覧会として作り手ばかりでなく、見る側のことも考慮して、次年度以降は従来どおり入選点数を160点前後に絞るべきとの意見が大勢を占めた。

（陶）星尚子がポイントを重ね招待作家となる。

【第30回展】

■会期 平成13（2001）年

書の部 2月9日（金）～2月18日（日）

絵画・彫塑の部 2月23日（金）～3月4日（日）

陶芸の部 3月9日（金）～3月18日（日）

写真の部 3月9日（金）～3月18日（日）

■会場 いわき市立美術館

■主催、協力は第24回展と同じ

■後援（財）福島県報徳社 福島民報社 福島民友新聞社 いわき民報社 NHK福島放送局 ラジオ福島 福島テレビ 福島中央テレビ 福島放送 テレビユー福島 いわき市民コミュニティ放送

■書の部

審査員：佐々木折柴（長）、田久高峰、村上皓南、
後藤桂仙

一般応募：190点（内、青少年6点）

展示点数：216点（一般190点、招待26点）

三賞受賞者：

- ①木田湛周「臨甘肅木簡」
- ②齊藤王寧「王維詩」
- ③猪狩桂舟「呉昌碩詩」

※佳作32点、新人賞2点

■絵画・彫塑の部

審査員：小林裕兎（青山学院女子短期大学講師・

春陽会会員)

一般応募：207点(内、青少年5点)

展示点数：189点(入選169点、招待2点、無鑑査18点)

絵画部門：168点(一般151点、招待2点、無鑑査15点)

彫塑部門：21点(一般18点、無鑑査3点)

三賞受賞者：

①大原直也「インスパイア」

②嶺崎茂子「Shiny wind」

③柳内憲治「漁港の記憶」

※佳作21点

美術館長賞 吉田昭男「のこされた風景」

■陶芸の部

審査員：田代清治右衛門(日本新工芸家連盟会員・十五代相馬駒焼)

一般応募：118点(内、青少年1点)

展示点数：122点(一般118点、招待4点)

三賞受賞者：

①齊藤浩子「青白磁月下美人文蓋物」

②兎玉良介「信楽彫紋壺」

③水野山翠「焼メ壺落葉」

※佳作7点

■写真の部

審査員：鈴木邦弘(日本写真家協会会員)

一般応募：213点(内、青少年1点)

展示点数：216点(一般213点、無鑑査3点)

三賞受賞者：

①渡辺 孝「日だまり」

②上原久子「絆」

③早坂公男「落花流文」

※佳作15点

◇後援にいわき市民コミュニティ放送が加わる。

(書) 金賀香楓と馬目香楊がポイントを重ね、招待作家となる。

(絵、彫) 県展の招待作家としての実績等が評価されて小滝勝平と吉田昭男が、ポイントを重ねたことにより安斉重夫が、新たに招待作家となる。

・昨年の反省から、入選点数を従来程度に減らしたが、1点1点が大きくなっていることもあり、展示全体では小品を二段掛けせずに展示できるリミットにきている。次年度については、受付の段階で横幅の総延長を計算し、今年の展示状況(横

幅の総延長)を超えないように落選点数を決めることになった。

(陶) 一般応募が昨年に比べて54点の大幅増となり、展示点数は122点となる。

【第30回記念事業】

・(書) より多くの人々が書に興味を持ち、書への理解を深めるための一助となるよう、道具等の解説を含みながらの「招待作家による公開実技」が美術館ロビーで開催された。

・(陶) 「歴代市長賞受賞作品の特別展示」が行われた。

・(写) 市内コレクターの協力を得て「クラシック・カメラの魅力～昭和初期からの名機50台」の特別展示が行われた。

・また、4部門合同の市美展30回記念パーティーが開催され、部門を超えての親睦と交流がはかられた。

【第31回展】

■会期 平成14(2002)年

絵画・彫塑の部 2月8日(金)～2月17日(日)

陶芸の部 2月22日(金)～3月3日(日)

写真の部 2月22日(金)～3月3日(日)

書の部 3月8日(金)～3月17日(日)

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第30回展と同じ

■絵画・彫塑の部

審査員：西村榮悟(二紀会委員・福島県美術協会常任幹事)

一般応募：185点(内、青少年4点)

展示点数：178点(入選155点、招待2点、無鑑査21点)

絵画部門：158点(一般139点、招待2点、無鑑査17点)

彫塑部門：20点(一般16点、無鑑査4点)

三賞受賞者：

①馬目晴夫「ある風景」

②鈴木当志子「首里若夏」

③安藤栄作「風の梯子」

※佳作20点

美術館長賞 安斉重夫「遠い空」

■陶芸の部

審査員：伊藤知香（伊藤アトリエ主宰）

一般応募：93点（内、青少年2点）

展示点数：99点（一般93点、招待6点）

三賞受賞者：

①鈴 忠壽「○」

②菅原洋子「ニューヨーク鎮魂」

③亀田大介「忘却の闇」

※佳作7点

■写真の部

審査員：沼田早苗（写真家）

一般応募：237点（内、青少年6点）

展示点数：240点（一般237点、無鑑査3点）

三賞受賞者：

①鈴木みち子「Sunset Beach」

②猪狩垂矢子「流れ友禪」

③渡辺浩徳「円な瞳」

※佳作15点

■書の部

審査員：田久奇峰（長）、酒井泰舟、田辺碩声、
谷津彤雲

一般応募：193点（内、青少年4点）

展示点数：219点（一般193点、招待24点、遺作
2点）

三賞受賞者：

①木田湛周「楽歳」

②猪狩桂舟「呉昌碩詩」

③細井清子「勿来の関のうた」

※佳作25点、新人賞1点

◇部門別の開催順について、書の部が最後にくる順番に変更となる。これは、従来の会期のままでは書の部では他の大規模な書の公募展と準備が重なり負担が大きいため、出品者が激減する可能性があるため、開催順を変更してほしいとの部からの申し入れがあったことによる。

（書）招待作家の小野寺峰堂と齊藤王寧が亡くなられ、遺作展示が行われる。

・書の部の搬入はそのほとんどが業者による午後からの搬入であることから、搬入の受付時間を午後1時からに変更する。

（絵、彫）柳内憲治がポイントを重ね招待作家と

なる。

（陶）プロとしての実績等が評価されて、児玉良介と齊藤浩子が招待作家となる。

・大型の作品が増えてきており、出品者の市美展にかける意気込みがうかがえる。

（写）一般応募が昨年比24点増で237点となった。初回から7年間で68点増えたことになり、市民の関心が高まってきたことがうかがえる。

・「展示場所が毎回同じような場所になっている」との不満が寄せられ、部会で、今後、そういうことのないように注意していくことが確認された。

【第32回展】

■会期 平成15（2003）年

絵画・彫塑の部 2月7日（金）～2月16日（日）

陶芸の部 2月21日（金）～3月2日（日）

写真の部 2月21日（金）～3月2日（日）

書の部 3月7日（金）～3月16日（日）

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第30回展と同じ

■絵画・彫塑の部

審査員：剣持 忠（メキシコ芸術院会員）

一般応募：190点（内、青少年5点）

展示点数：181点（入選160点、招待1点、無鑑
査20点）

絵画部門：161点（一般144点、招待1点、無鑑
査16点）

彫塑部門：20点（一般16点、無鑑査4点）

三賞受賞者：

①安藤栄作「風のはしご」

②滑川けい「月に咲く花」

③木村健治「city life-vision」

※佳作18点

美術館長賞 宮田英子「陽に映えて」

■陶芸の部

審査員：ゲルト・クナッパ（無所属）

一般応募：57点（内、青少年1点）

展示点数：62点（一般57点、招待5点）

三賞受賞者：

①佐藤俊之「大祝鶴姫」

②鈴 忠壽「環」

③川口江里「無題」

※佳作7点

■写真の部

審査員：白旗史郎（JPS・PSJ会員）

一般応募：252点（内、青少年1点）

展示点数：255点（一般252点、無鑑査3点）

三賞受賞者：

①吉田精利「里香とユウクン」

②折原三郎「海物語」

③縣 和子「秋へようこそ」

※佳作15点

■書の部

審査員：村上皓南（長）、園部秋月、菅野桂洞、

高久香扇

一般応募：185点（内、青少年4点）

展示点数：210点（一般185点、招待25点）

三賞受賞者：

①鈴木我岐「古詩二首」

②大平峰生「潘岳詩」

③永山閑遠「臨姚伯多造像記」

※佳作20点、新人賞1点

◇絵画・彫塑、陶芸、写真の部における、一人の審査員による審査に対して不満があり、複数による審査を希望するとの市民の声が教育委員会に寄せられ、このことについて運営委員会において協議した。その結果、「どんな審査を行っても不平・不満が出るものである。毎年審査員が変わる当市美展には、さまざまな傾向の審査員が来るので、一人でも複数年で見れば公平な審査が行われていると思われる」、「地元の作家が審査員の場合、出品者との間があまりにも身近すぎるため、逆に審査の偏りなどの問題が指摘される可能性が高い」など否定的な意見が多く、複数による審査は見送られた（※書の部は除く）。

（絵、彫）峰丘が新たに部会長となる。

・会期の初日に「無鑑査作家による入選作品批評会」を実施し、予想以上に好評となる。その後も続けられている。

・部会において、部会と運営委員会との関係や無鑑査作家への推薦過程等が曖昧だとの指摘があり、臨時部会を開催し、絵画・彫塑の部独自の規約（内規）を作成し、誰もが分かりやすいように明文化した。例えば、「運営委員に欠員が生じた場合は、部会において協議し候補者を提案する」

というように。内規は必要に応じて更新される。

（書）木田湛周がポイントを重ね招待作家となる。

・招待制度について協議するため、書の部の臨時部会が開催された。その理由は「書の部では、一般出品者数に対して招待作家が多すぎる現状があり、今後も若い世代の書離れが進み、一般出品者の顔ぶれが大きく変わることなく応募点数が減少し続ける可能性が高い中で、現在の制度をこのまま継続していくと、招待作家を量産するばかりでレベルの低下を招きかねない」ということを多くの部会員が懸念したからである。協議の結果、招待作家の下に「委嘱作家」を設けることになり、次回展以降、次のように実施することになった。

・上位三賞及び佳作上位三賞の受賞点数（市長賞2点、議長賞1点、教育長賞1点、佳作上位三賞各0.5点）が合計4点に達した者で、なおかつ上位三賞受賞経験者のみを、委嘱作家の候補として運営委員会に提案できる。

・書の部会においてその業績が認められた委嘱作家を、招待作家候補として運営委員会に提案できる。なお、佳作上位三賞のポイントについては、遡って加算しないこととする。また、今回で4ポイントに達した永山閑遠については次回の運営委員会で招待作家候補として提案する。

（陶）昨年の反省会を受け、作品のレイアウト作業を審査立ち合いの招待作家3人で行うことにした。少人数でまとまりが早くスムーズだったが、部会全体でわいわいやるところに市美展の良さがあると思う部会員が多く、次回からは前に作業のできる部会員全員で展示作業にあたることになった。

（写）募集要項の規格で定めていない、単写真、組写真のいずれにも属さない表現法（カラージュやモニタージュなど）の扱い等について反省会で問題となる。協議の結果、募集要項の表記は従来通りにし、なるべく広い解釈ができるような状態にしておき、さまざまな作品を受け入れていくことになった。

【第33回展】

■会期 平成16（2004）年

絵画・彫塑の部 2月6日（金）～2月15日（日）

陶芸の部 2月20日(金)～2月29日(日)
写真の部 2月20日(金)～2月29日(日)
書の部 3月5日(金)～3月14日(日)

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第30回展と同じ

■絵画・彫塑の部

審査員：金澤 毅(美術評論家)
一般応募：179点(内、青少年0点)
展示点数：175点(入選153点、招待1点、無鑑査21点)
絵画部門：157点(一般140点、招待1点、無鑑査16点)
彫塑部門：18点(一般13点、無鑑査5点)
三賞受賞者：
①野崎静子「過ぎ去りし思い出」
②鈴 忠壽「●」
③鈴木儀一「時の流れ- '04」
※佳作18点、
美術館長賞 鈴木邦夫「YACHT-04-1」

■陶芸の部

審査員：佐藤 幹(陶芸家・日本工芸会正会員)
一般応募：71点(内、青少年0点)
展示点数：78点(一般71点、招待7点)
三賞受賞者：
①大谷 巖「信楽焼縮五角壺」
②佐藤俊之「セカンド・インパクト」
③鈴 忠壽「●」
※佳作7点

■写真の部

審査員：織作峰子(写真家)
一般応募：263点(内、青少年1点)
展示点数：265点(一般263点、無鑑査2点)
三賞受賞者：
①永山 亘「心の想い“閉山”」
②鶴沼信男「祈陽」
③鳥海陽太郎「アブラゼミ羽化の夜」
※佳作15点

■書の部

審査員：佐々木折柴(長)、滝翠嶺、神林東伸、
細井研堂
一般応募：190点(内、青少年3点)
展示点数：218点(一般190点、招待28点)
三賞受賞者：
①鈴木我峻「唐詩二首」

②細井清子「みちのくのうた」

③殿塚聖安「宋詞」

※佳作22点、新人賞1点

◇運営委員会において、審査や展示場所についての苦情が一部の運営委員に寄せられ、対応に苦慮している現状をふまえ、募集要項に「※審査及び展示場所に対する苦情は、一切受け付けられないものとする。」等の一文を記載してほしいとの提案があった。協議の結果、このような性質の条項を新しく設けていくと際限がないこと、また、展覧会全体の品位を損ないかねないことなどの理由から、記載しないこととし、運営委員はそうした苦情に対して説明し、理解してもらうよう努めることになった。

(絵、彫)安藤栄作がポイントを重ね招待作家となる。

・青少年の創作意欲の向上を促すため、民間からの協賛により、「T S C 青少年奨励賞」が設けられた。ただし、今年は該当者なし。この賞は、三賞を含む受賞者の中から25歳以下の上位入賞者2名に、三賞または佳作と重複して与えられる賞である。受賞者はパサロンで個展をすることができた。

(書)永山閑遠がポイントを重ね招待作家となる。

【第34回展】

■会期 平成17(2005)年

絵画・彫塑の部 2月5日(土)～2月13日(日)
陶芸の部 2月18日(金)～2月27日(日)
写真の部 2月18日(金)～2月27日(日)
書の部 3月4日(金)～3月13日(日)

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第30回展と同じ

■絵画・彫塑の部

審査員：藪野 健(画家・二紀会理事)
一般応募：181点(内、青少年5点)
展示点数：176点(入選157点、招待1点、無鑑査18点)
絵画部門：156点(一般140点、招待1点、無鑑査15点)
彫塑部門：20点(一般17点、無鑑査3点)

三賞受賞者：

- ①湖月健太郎「振り返った時に見た風景(05)」
 - ②若林喜代子「05 秋の譜」
 - ③根本 唯「招待状 I」
- ※佳作17点、T S C 青少年奨励賞 2 点
美術館長賞 石川進「パンゲア」

■陶芸の部

審査員：瀧田項一（作陶家）

一般応募：73点（内、青少年3点）

展示点数：80点（一般73点、招待7点）

三賞受賞者：

- ①櫛田昌弘「花器」
 - ②佐藤俊之「七武人」
 - ③加藤由美「焼メ花入」
- ※佳作7点

■写真の部

審査員：熊切圭介（写真家）

一般応募：247点（内、青少年1点）

展示点数：250点（一般247点、無鑑査3点）

三賞受賞者：

- ①菊地英夫「春の流れ」
 - ②石川義紀「ハプニング」
 - ③永山 亘「刻の想い『閉山』」
- ※佳作18点

■書の部

審査員：田久奇峰（長）、鈴木胡秀、荒井東苑、
金賀香楓

一般応募：187点（内、青少年4点）

展示点数：215点（一般187点、招待27点、委嘱
1点）

三賞受賞者：

- ①谷津淑夫「古詩」
 - ②殿塚聖安「臨居延漢簡」
 - ③細井清子「古今和歌集・仮名序」
- ※佳作21点、新人賞2点

◇（絵、彫）入落通知のハガキが開幕前に出品者に届かないことがあり、落選者がそのことを知らずに来館することが問題となっていた。そういうことを防ぐために、昨年の部会の協議を受け、開幕日を従来の金曜日から1日遅い土曜日に変更した。それにより開催日数が他部門より1日少なくなった。

・部会において、未発表作品の定義を逸脱した作

品が招待、無鑑査、受賞作品に出品されていることが問題視された。協議の結果、次年度以降、募集要項には未発表の表記に「すべての公募展入選作品を除く」を加えることを運営委員会に提案することになった（※この件は翌年の運営委員会で否決された）。

・同部の内規においては、「招待作家・無鑑査作家の出品作品は、過去1年以内に完成した未発表の新作に限る」の一文を加えることにした。

・高校生参加者の育成と活性化を目的として新たな賞を設けることについて、臨時部会を開催し協議した。その結果、スポンサーに心当たりもあることから、一般と青少年（20歳未満）とを分けて審査し、青少年の中から「青少年賞」を一つ設けることにした。この賞は、その作品が佳作以上の賞に該当する場合は、ダブル受賞も可能とした。ただし、該当者なしもありで、そうした判断は審査員に任せることになった。

（陶）鈴木壽がポイントを重ね招待作家となる。

・大型の作品が増えてきたこともあり、企画展示室1だけでは窮屈な展示となった。次回以降ではロビーにも展示することを検討することになった。

（写）常磐の炭鉱に関する記録的な写真を組み合わせた作品が、前回展に続き三賞を受賞した。これらの作品について、反省会で、類似的な作品であり、しかも古いネガを用いていることから、未発表の作品という募集要項の決まりから逸脱しているのではないかと意見が出された。対応を協議したが、未発表の定義等の結論が出ず、各自のモラルを尊重することになった。

（書）鈴木我峻がポイントを重ね委嘱作家となる。

【第35回展】

■会期 平成18（2006）年

絵画・彫塑の部 2月11日（土）～2月19日（日）

陶芸の部 2月24日（金）～3月5日（日）

写真の部 2月24日（金）～3月5日（日）

書の部 3月10日（金）～3月19日（日）

■会場 いわき市立美術館

■主催 いわき市民美術展覧会運営委員会 いわき市教育委員会 いわき市文化協会 いわき市

立美術館

■後援、協力は第30回展と同じ

■絵画・彫塑の部

審査員：谷 新（美術評論家・宇都宮美術館長）

一般応募：207点（内、青少年12点）

展示点数：180点（入選159点、無鑑査21点）

絵画部門：155点（一般139点、無鑑査16点）

彫塑部門：25点（一般20点、無鑑査5点）

三賞受賞者：

①木村健治「夜明け」

②高野正晃「明るい闇」

③佐藤もと「明日へ」

※佳作18点、青少年賞1点、T S C 青少年奨

励賞2点

美術館長賞 湖月健太郎「SPRING WIND」

■陶芸の部

審査員：林 香君（作陶家）

一般応募：92点（内、青少年2点）

展示点数：100点（一般92点、招待8点）

三賞受賞者：

①甲高幸男「焼ゞ一輪差し」

②箱崎りえ「ROUGH」

③③③③商会「陶フィギア箸置」

※佳作8点

■写真の部

審査員：蜂須賀秀紀（写真家）

一般応募：251点（内、青少年1点）

展示点数：253点（一般251点、無鑑査2点）

三賞受賞者：

①上遠野真人「はやくあいたいな」

②中澤美紀子「干潟」

③小野貞夫「地球の根っ子」

※佳作17点

■書の部

審査員：村上皓南（長）、石川大湊、園部秋月、馬目香楊

一般応募：181点（内、青少年1点）

展示点数：209点（一般181点、招待26点、委嘱2点）

三賞受賞者：

①鈴木花泉「周立詩」

②宮崎雪虹「接瑞雲」

③小松遊苑「雪深き岩の」

※佳作22点、新人賞1点

◇主催の「いわき市文化団体連絡協議会」は名称変更して、「いわき市文化協会」となる。

（絵、彫）湖月健太郎がポイントを重ね無鑑査作家となる。

・無鑑査作家推薦の内規について、「受賞歴にかかわらず、美術功労者の中から、無鑑査作家、招待作家の候補者を運営委員会に提案できる。ただし、部会出席者の3分の2の同意を必要とする」の一項を削除する。

（陶）佐藤俊之がポイントを重ね招待作家となる。

・陶芸と写真の部では、より多くの方が出品しやすいように、搬入の受付締切時間を午後5時から6時に延長する。

（写）山口忠重が部会長となり、第42回展まで務める。

（書）細井清子がポイントを重ね委嘱作家となる。

・第35回の節目の事業として、招待作家による公開実技を展覧会最終日に行い、好評を博す。

【第36回展】

■会期 平成19（2007）年

絵画・彫塑の部 1月20日（土）～1月28日（日）

陶芸の部 2月2日（金）～2月11日（日）

写真の部 2月2日（金）～2月11日（日）

書の部 2月16日（金）～2月25日（日）

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第35回展と同じ

■絵画・彫塑の部

審査員：山本容子（版画家）

一般応募：180点（内、青少年9点）

展示点数：167点（入選150点、無鑑査17点）

絵画部門：146点（一般132点、無鑑査14点）

彫塑部門：21点（一般18点、無鑑査3点）

三賞受賞者：

①小野忠男「3月の6日頃にー07」

②小野重治「おおきなこども」

③ワキサカ ヨーコ「月がでている」

※佳作16点、青少年賞2点

美術館長賞 渡辺文雄「刻」

■陶芸の部

審査員：神谷紀雄（陶芸家／日本工芸会理事）

一般応募：86点（内、青少年0点）

展示点数：92点（一般86点、招待6点）

三賞受賞者：

- ①菅野征市「舟形花器」
 - ②樋田和代「月下美人文扁壺『一夜の思ひ』」
 - ③鈴木康美「練込六角壺」
- ※佳作8点

■写真の部

審査員：高村 規（写真家／㈱日本広告写真家協会顧問）

一般応募：241点（内、青少年1点）

展示点数：243点（一般241点、無鑑査2点）

三賞受賞者：

- ①猪狩俊子「四国遍路のこどもたち」
 - ②猪狩清恵「突風」
 - ③永山 淳「流砂の大樹」
- ※佳作19点

■書の部

審査員：佐々木折柴（長）、矢内齊、芳賀二葉、木田湛周

一般応募：184点（内、青少年6点）

展示点数：213点（一般184点、招待27点、委嘱2点）

三賞受賞者：

- ①大河原一酔「竜虎情」
 - ②小松遊苑「さむしろの」
 - ③鈴木花泉「徐嘔詩」
- ※佳作25点、新人賞1点

◇美術館のアスベスト除去工事等のため、1月20日開幕という例年より早い時期の会期となる。

・1階ロビーの南側ガラス面から差し込む太陽光が作品鑑賞を妨げていることが問題となり、遮光幕を設置する。

（絵、彫）木村健治がポイントを重ね無鑑査作家となる。

（写）無鑑査作家による作品解説会を表彰式の日に行う。これは名称を変えながらその後も続けられている。

（書）毎日の解説当番を設けていたが、利用者がほとんどいないこともあり廃止し、表彰式の日「審査員による作品解説会」を展示室で行うことになる。これはその後も続けられ、47回展以降は招待作家が解説をしている。

【第37回展】

■会期 平成20（2008）年

絵画・彫塑の部 2月9日（土）～2月17日（日）

陶芸の部 2月22日（金）～3月2日（日）

写真の部 2月22日（金）～3月2日（日）

書の部 3月7日（金）～3月16日（日）

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第35回展と同じ

■絵画・彫塑の部

審査員：茂木健一郎（脳科学者）

一般応募：188点（内、青少年11点）

展示点数：178点（入選158点、無鑑査20点）

絵画部門：152点（一般136点、無鑑査16点）

彫塑部門：26点（一般22点、無鑑査4点）

三賞受賞者：

- ①齋藤弘美「生家（一枚の写真より）」
- ②ダビ「Untitled」
- ③吉田重信「重陽」

※佳作17点、青少年賞2点、T S C 青少年奨励賞2点
美術館長賞 石川進「水棲之譜」

■陶芸の部

審査員：竹内順一（東京藝術大学教授）

一般応募：92点

展示点数：100点（一般92点、招待8点）

三賞受賞者：

- ①菅野征市「焼締 銘花魁」
 - ②志賀文男「緑彩魚文鉢」
 - ③市川陶之臣「未来に明るい今日を送ろう」
- ※佳作8点

■写真の部

審査員：大石芳野（写真家）

一般応募：258点（内、青少年1点）

展示点数：260点（一般258点、無鑑査2点）

三賞受賞者：

- ①高木理恵「タイムトンネル」
 - ②蛭田 光「家族譜Ⅳ-曾祖父の祭り」
 - ③岩塚昭広「思い出の桜」
- ※佳作26点

■書の部

審査員：村上皓南（長）、鈴木胡秀、吉田汀秀、田久芳漣

一般応募：200点（内、青少年8点）

展示点数：229点（一般200点、招待25点、委嘱4点）

三賞受賞者：

- ①物江虹唐「国分青厓詩」
 - ②金成晁泉「蓉湖」
 - ③小松遊苑「花散りし」
- ※佳作23点、新人賞2点

◇厳しい経済情勢のゆえ、市からの補助金が200万円から180万円に減額となった。その対応を運営委員会で協議した結果、諸物価が値上がりしている状況や近隣都市と比べていわき市美展の出品料が安価なこと（郡山市の場合、一般2500円）などを考慮し、一般の出品料を1500円から2000円に値上げすることが決まった。青少年については500円に据え置きとなった。

・近年、絵画・彫塑の部に工芸的な作品の出品がみられることから、工芸の部を新設することについて運営委員会で協議した。その結果、工芸的な作品を応募する人たちが、いまだ団体としての団結が不十分であり、かつ団体として市美展に参加するという意思表示をみせているわけでもないことから、早急に工芸の部を創設することは困難であり、今後の課題とすることが確認されるにとどまった。

（陶）ガラスや紙粘土などを素材とする作品が応募される可能性があるため、募集要項に「自ら成形し、焼成した磁土、陶土によるオリジナル作品（樹脂粘土は不可）」の文言を追加する。

（写）反省会において、デジタル加工の作品が増えてきたことが話題となったが、デジタルとアナログを別部門にしたり、審査を分けて行ったりする必要がないことが確認された。

（書）大河原一酔と鈴木花泉がポイントを重ね委嘱作家となる。

【第38回展】

■会期 平成21（2009）年

絵画・彫塑の部 2月14日（土）～2月22日（日）
陶芸の部 2月27日（金）～3月8日（日）
写真の部 2月27日（金）～3月8日（日）
書の部 3月13日（金）～3月22日（日）

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援は第35回展と同じ

■協力 いわき美術協会 いわき書道協会 いわき陶芸協会 いわきアート集団

■絵画・彫塑の部

審査員：塚田晴可（ギャラリー無境主人）

一般応募：204点（内、青少年25点）

展示点数：187点（入選168点、招待19点）

絵画部門：158点（一般143点、招待15点）

彫塑部門：29点（一般25点、招待4点）

三賞受賞者：

- ①渡辺 啓「FLOWER」
- ②根守キヌ子「あゆみさん」
- ③渡辺八市「原風景」

※佳作17点、青少年賞1点、T S C 青少年奨励賞1点

■陶芸の部

審査員：井高洋成（陶芸家）

一般応募：83点

展示点数：90点（一般83点、招待7点）

三賞受賞者：

- ①大谷 巖「信楽焼縮壺『宇宙への想い』」
- ②樋田和代「釉裏紅搔落文大皿」
- ③箱崎りえ「つちのことそのすまい」

※佳作7点

■写真の部

審査員：江成常夫（写真家）

一般応募：244点（内、青少年2点）

展示点数：246点（一般244点、無鑑査2点）

三賞受賞者：

- ①吉田精利「真希子16才の春に」
- ②森谷祐治「満月」
- ③上遠野真人「雄泳」

※佳作25点

■書の部

審査員：佐々木折柴（長）、川島大佳、永山閑遠

一般応募：183点（内、青少年5点）

展示点数：213点（一般183点、招待26点、委嘱4点）

三賞受賞者：

- ①宮崎雪虹「娑羅樹」
- ②伊藤松茄「臨武威漢簡」
- ③坂本一道「太田水穂のうた」

※佳作27点、青少年賞1点

◇協力にいわきアート集団が加わる。

(絵、彫) 実質的に招待作家がゼロのため、無鑑査作家をすべて招待作家とし、同部の無鑑査作家をなくした。これにより無鑑査作家を対象にした美術館長賞は廃止となる。

・青少年の出品者を明確にするため、次回展以降、キャプションに明示することになる。

・佳作賞についてスポンサーの意向を反映してほしいとの要望があったが、審査に混乱が生じることもあるため、従来どおり審査員に一任することが確認された。

(陶) 募集要項の規格で、自ら焼成しなければならないと勘違いする人がいたため、次のように変更した。

「自ら成形した磁土、陶土によるオリジナル作品(樹脂粘土は不可、焼成は共同も可)」

(書) 20歳未満の若者を対象に若手育成を目的に、青少年賞が設けられる。

【第39回展】

■会期 平成22(2010)年

絵画・彫塑の部 2月13日(土)～2月21日(日)

陶芸の部 2月26日(金)～3月7日(日)

写真の部 2月26日(金)～3月7日(日)

書の部 3月12日(金)～3月21日(日)

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第38回展と同じ。

■絵画・彫塑の部

審査員：大津英敏(多摩美術大学教授)

一般応募：196点(内、青少年7点)

展示点数：192点(入選174点、招待18点)

絵画部門：165点(一般151点、招待14点)

彫塑部門：27点(一般23点、招待4点)

三賞受賞者：

①蛭田 誠「マテーラの洞窟住居」

②平子貞男「R-62N(景)」

③根本知樹「T・o・m・b・o」

※佳作16点、青少年賞1点、青少年奨励賞1点

■陶芸の部

審査員：佐伯守美(陶芸家)

一般応募：92点

展示点数：101点(一般92点、招待9点)

三賞受賞者：

①横山 猛「炎」

②佐藤優美「吹付け文四方皿」

③和地二郎「焼メ花瓶」

※佳作7点

■写真の部

審査員：中谷吉隆(写真家)

一般応募：251点

展示点数：255点(一般251点、無鑑査4点)

三賞受賞者：

①吉田暁欧「夕暮れさんぽ道」

②遠藤 勉「ギャング」

③岩塚昭広「いってきまーす」

※佳作27点

■書の部

審査員：村上皓南(長)、田辺碩声、園部秋月、松崎秋香

一般応募：156点(内、青少年7点)

展示点数：184点(一般156点、招待23点、委嘱4点、遺作展示1点)

三賞受賞者：

①宮崎雪虹「桃華浪」

②大平峰生「玄言新記明老部」

③小松遊苑「あすからは」

※佳作18点、青少年賞1点

◇(絵、彫) 昨年の反省会の結果を受け、募集要項の規格で、これまで「版画、水彩画については、マットで切られた部分を作品とみなす」となっていたが、単に「マットで切られた部分を作品とみなす」ことに変更し、油彩画等も含めることになった。なお、その下限は10号とする。

・これまで「額装については幅3cm以内の仮縁額装とし、それ以外のは受け付けない」としていたが、「作品保全のため、原則として額装については、幅3cm以内の仮縁額装とする。」に変更し、作品の内容によっては、額縁を付けられないものも受け付けることになった。

・部会員の中から選ばれた展示部長が中心となり、展示のレイアウトが決められるが、今回、招待作品の大半が1階ロビーに展示された。反省会では、それがこれまでにない展示ということで評価する意見が多かった。

(陶) 大谷巖がポイントを重ね招待作家となる。

・部会においてプロの作家についても優遇はせず、ポイント制により招待作家に推薦していくことが確認された。

・オブジェ的作品で植物が付随していたものを今回は受け入れたが、器ものについては、植物の使用は禁止することが確認された。

(写) 上遠野真人と吉田精利がポイントを重ね無鑑査作家となる。

(書) 招待作家の田久奇峰が亡くなられ、遺作展示が行われる。

【第40回展】

■会期 平成23(2011)年

絵画・彫塑の部 2月12日(土)～2月20日(日)

陶芸の部 2月25日(金)～3月6日(日)

写真の部 2月25日(金)～3月6日(日)

書の部 3月11日、4月30日(土)～5月8日(日)

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援は第38回展と同じ

■協力 いわき美術協会 いわき書道協会 いわき陶芸協会 いわきアート集団 いわき写真協会

■絵画・彫塑の部

審査員：入江 観(女子美術大学名誉教授)

一般応募：211点(内、青少年28点)

展示点数：200点(一般181点、招待19点)

三賞受賞者：

①木下淑之「ゆずり葉(神降ろし)」

②小野重治「おちば」

③会田光子「猫まんだら」

※佳作16点、青少年賞1点、青少年奨励賞1点

■陶芸の部

審査員：高内秀剛(陶芸家)

一般応募：75点

展示点数：84点(一般75点、招待8点、遺作展示1点)

三賞受賞者：

①山川博士「波」

②平子貞男「風化(オーロのたび)」

③緒方二千夫「手鉢・小皿(5ヶ)」

※佳作7点

■写真の部

審査員：安珠(写真家)

一般応募：235点(内、青少年1点)

展示点数：239点(一般235点、招待4点)

三賞受賞者：

①泉 武子「撮影会」

②タイラクナツキ「imagine」

③跡部裕人「専心」

※佳作27点

■書の部

審査員：佐々木折柴(長)、酒井泰舟、荒井東苑、滝翠嶺

一般応募：184点(内、青少年9点)

展示点数：212点(一般184点、招待24点、委嘱3点、遺作展示1点)

三賞受賞者：

①物江虹唐「賀鑄詩」

②井戸川保子「五月雨」

③高野 晶「薩都刺詩」

※佳作30点、青少年賞1点

◇書の部の会期初日の3月11日に東日本大震災が発生し、中断となり、書の部はあらためて4月30日～5月8日の会期で開催された。地震の影響で額などが損傷する。

・協力にいわき写真協会が加わる。

・募集要項に審査員の名前を入れるようになる。

(絵、彫)蛭田誠がポイントを重ね招待作家となる。

・作品の位置を決める展示部長は招待作家から選出することになる。

(陶) 陶芸の部創設に尽力された初代の部会長である緑川宏樹が亡くなられ、遺作展示が行われる。

(写) 無鑑査作家はすべて招待作家となり、今後、無鑑査の名称は使わないことになる。

(書) 40回記念事業として、招待作家による揮毫会を表彰式の日と最終日に予定していたが、震災の影響で中止となった。

・より大きな作品を受け入れられるよう、作品の規格を表装仕立上がり寸法で、「10,800cm²(12平方尺)以内」から「12,600cm²(14平方尺)以内」に変更する。これにより横幅は210cmまで可能となった。

・半折サイズ以内のものは第2部とし、大きさを区別を設けることになった。

・宮崎雪虹と小松遊苑がポイントを重ね委嘱作家

となる。

・委嘱作家の細井清子が亡くなられ、遺作展示が行われる。

【第41回展】

■会期 平成24(2012)年

絵画・彫塑の部 2月11日(土)～2月19日(日)

陶芸の部 2月24日(金)～3月4日(日)

写真の部 2月24日(金)～3月4日(日)

書の部 3月9日(金)～3月18日(日)

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第40回展と同じ

■絵画・彫塑の部

審査員：深井 隆(彫刻家・東京藝術大学教授)

一般応募：190点(内、青少年25点)

展示点数：207点(一般190点、招待16点、遺作展示1点)

三賞受賞者：

①大川 浩「明日へ吹く風」

②木下淑之「昼月来狐」

③清水ナミ子「悠久の刻」

※佳作16点、青少年賞1点、青少年奨励賞1点

■陶芸の部

審査員：前田正博(陶芸家)

一般応募：95点

展示点数：104点(一般95点、招待9点)

三賞受賞者：

①大平登美子「黄瀬戸八寸角鉢」

②塩山久子「花器」

③山川博士「華の箱舟」

※佳作7点

■写真の部

審査員：徳光ゆかり(写真家)

一般応募：213点(内、青少年2点)

展示点数：217点(一般213点、招待4点)

三賞受賞者：

①引地幸枝「じいちゃん大好き」

②舩井美智子「いつも一緒に」

③上原久子「縞模様」

※佳作18点

■書の部

審査員：村上皓南(長)、鈴木胡秀、高久香扇、

細井研堂

一般応募：137点(内、青少年5点)

展示点数：164点(一般137点、招待22点、委嘱5点)

三賞受賞者：

①金成晁泉「呉昌碩詩」

②江川文子「邂逅—『伊勢物語』東下り—」

③新妻淡遠「七字句」

※佳作28点、青少年賞1点

◇震災の影響により、一般応募作品は、前年度と比較し、絵画・彫塑の部で21点減、写真の部で18点減、書の部で47点減となった。その一方で、陶芸の部では20点増となった。これは相双地区からいわき市への避難者が出品したことによる。震災の被害の大きさからすれば、出品点数がもっと減るのではないかとの予想もあったが、これほどの出品には、市民の文化的活動への意欲の大きさが反映されたのであろう。

ほかに震災の影響としては、市からの補助金が20%減の144万円となり、例年に比べて食料費や審査員謝金などの経費を切り詰めての運営となったことや、写真の部の協賛件数が昨年度の27本から10本減の17本になったこと、また、震災をモチーフとした作品が見受けられたことなどが挙げられる。

(絵、彫)招待作家の湖月健太郎が亡くなられ、遺作展示が行われる。

・搬入時における全作品の横幅総計を計算し、壁面の全長と比べた結果、落選を出さなくても展示が可能なが分かり、以後44回展を除きこのことが続いている。

・現代の様々な表現形式に対応するため、次回展から高校生以上のグループによる共同制作作品の受け入れを試行していくことになった。

(陶)平子貞男がポイントを重ね招待作家となる。(写)作品が年々大きくなり展示が苦しくなってきたため、規格を106×106cm以内から90×90cm以内に変更する。

・キャプションを手書きからパソコン出力に変え、見やすいと好評を得る。

(書)物江虹唐がポイントを重ね委嘱作家となる。

【第42回展】

- 会期 平成25(2013)年
絵画・彫塑の部 2月9日(土)～2月17日(日)
陶芸の部 2月22日(金)～3月3日(日)
写真の部 2月22日(金)～3月3日(日)
書の部 3月8日(金)～3月17日(日)

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第40回展と同じ

■絵画・彫塑の部

審査員：南畠 宏(美術評論家・女子美術大学教授)

一般応募：182点(内、青少年20点)

展示点数：196点(一般182点、招待14点)

三賞受賞者：

- ①久保木 舞「紡ぎ歩く」
- ②森 二郎「あの日の海を憶う。」
- ③大平 遼「少年」

※佳作15点、青少年賞1点、青少年奨励(X)賞1点

■陶芸の部

審査員：馬場由知子(陶芸家)

一般応募：123点(内、青少年1点)

展示点数：131点(一般123点、招待8点)

三賞受賞者：

- ①山川博士「粉引縦裂水指」
- ②樋田和代「釉裏紅ゆり文大鉢」
- ③伊藤由季子「彩磁クレマチス文水指」

※佳作6点

■写真の部

審査員：土田ヒロミ(写真家)

一般応募：196点(内、青少年0点)

展示点数：200点(一般196点、招待4点)

三賞受賞者：

- ①草野小鶴恵「緋月の刻」
- ②舩井美智子「命のせんとく(三姉妹)」
- ③丹野 孝「可憐に舞う」

※佳作17点

■書の部

審査員：佐々木折柴(長)、石川大濑、神林東伸、金賀香楓

一般応募：153点(内、青少年10点)

展示点数：182点(一般153点、招待24点、委嘱5点)

三賞受賞者：

- ①新妻淡遠「七言句」
- ②江川文子「忍ぶ道」
- ③本田葉月「杜甫詩」

※佳作32点、青少年賞2点

◇運営委員会において、「彫塑の部に工芸的な作品が出品されているので、工芸の部を新設できないか」との意見があった。協議の結果、「工芸の人たちが市美展の運営を主体的に担えるほどまとまっていない」、「新部門開設に向けての盛り上がりがない」、「ジャンルが多くて、審査や運営が難しい」などの意見が出され、時期尚早との判断がなされた。

(絵、彫)展示において窮屈になるのを避けるため、従来のパネル組みから展示パネルの数を増やしたパネル組みにし、展示壁面の長さを14.4m増やした。

(書)第2部作品のサイズの規格は、表装仕上がり寸法で、「8,100cm²(9平方尺)以内」から「9,000cm²(10平方尺)以内」へと変更する。

・大河原一酔と草野蘆舟が、実績が評価され招待作家となる。

【第43回展】

- 会期 平成25(2013)年
絵画・彫塑の部 7月27日(土)～8月4日(日)
陶芸の部 8月9日(金)～8月18日(日)
写真の部 8月9日(金)～8月18日(日)
書の部 8月23日(金)～9月1日(日)

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第40回展と同じ

■絵画・彫塑の部

審査員：山口 実(画家・行動美術協会会員)

一般応募：196点(内、青少年22点)

展示点数：214点(一般196点、招待17点、遺作展示1点)

三賞受賞者：

- ①松澤哲也「車窓から6月」
- ②杉本正春「竜串海岸」
- ③平子貞男「儘」

※佳作15点、青少年賞1点

■陶芸の部

審査員：伊藤公象（陶造形作家）

一般応募：139点（内、青少年0点）

展示点数：148点（一般139点、招待9点）

三賞受賞者：

①佐藤 界「旅一（はじまり）」

②石井光榮「砂上の牢獄」

③鈴木ゆかり「広がれ！ Love骨密度」

※佳作7点

■写真の部

審査員：辰野 清（写真家）

一般応募：188点（内、青少年0点）

展示点数：192点（一般188点、招待4点）

三賞受賞者：

①早坂慧子「夏の思い出」

②横山 孝「怒濤に耐えて」

③徳田崇史「港町にあふれる喜び」

※佳作17点

■書の部

審査員：村上皓南（長）、矢内齊、芳賀二葉、
谷津彤雲

一般応募：145点（内、青少年11点）

展示点数：173点（一般145点、招待23点、委嘱
5点）

三賞受賞者：

①菜花琴雪「節臨黄山谷詩巻」

②新妻淡遠「司空曙詩句」

③臺 麗子「ほとゝぎす」

※佳作32点、青少年賞2点

◇美術館の空調工事のため、夏の時期の開催となる。

（絵、彫）招待作家の木村健治が亡くなられ、遺作展示が行われる。

・内規で額縁の幅を3.3cmまで認めることにする。
・招待作家の寸法の規格は、一般出品作品よりも小さくされていたが、一般作品同様の寸法内に変更する。

・作品搬入後にそれが他の公募展に入選した作品であったことが判明したのがあり、問題となる。今後は「公募展で入選した作品は拒否する」ということになった。

（写）上遠野良夫が部会長となり、第46回展まで務める。

・募集要項で条件としている「未発表の創作作品に限る」について、より分かりやすく、「他の公募展等で入賞、入選した作品を出品してはいけない」等の文言を追加してほしいとの意見が出て、写真の部として次年度の運営委員会で提案することになる。

（陶）山川博士がポイントを重ね招待作家となる。

・陶芸絵具ではないアクリル絵具などで彩色した作品がみられたことにより、募集要項の規格で、「彩色は陶芸絵具に限る」の一文を加えることになる。

・審査員は陶芸家の伊藤公象で、第1回目に続き2度目。これは陶芸の部が20回目となり、第1回目との比較をしてもらうために選ばれた。

【第44回展】

■会期 平成27（2015）年

書の部 2月6日（金）～2月15日（日）

絵画・彫塑の部 2月21日（土）～3月1日（日）

陶芸の部 3月6日（金）～3月15日（日）

写真の部 3月6日（金）～3月15日（日）

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第40回展と同じ

■書の部

審査員：村上皓南（長）、吉田汀秀、田久芳涯、
草野蘆舟

一般応募：120点（内、青少年7点）

展示点数：146点（一般120点、招待21点、委嘱
4点、遺作展示1点）

三賞受賞者：

①村越紫苑「七言絶句」

②阿部嶋泉「島崎藤村の詩」

③山川榮雪「七言詩」

※佳作28点、青少年賞1点

■絵画・彫塑の部

審査員：福島瑞穂（美術家）

一般応募：212点（内、青少年26点）

展示点数：210点（一般193点、招待16点、遺作
展示1点）

三賞受賞者：

①大内重子「浄」

②杉本正春「袋田の滝」

③小島敦雄「風街ろまん・冬の空・ぼくは、きつとかぜをひいてるんです。」

※佳作15点、青少年賞1点、青少年奨励(X)賞2点

■陶芸の部

審査員：鈴木 環（陶芸家）

一般応募：117点（内、青少年1点）

展示点数：127点（一般117点、招待10点）

三賞受賞者：

①小川節子「布目花入」

②横山 猛「♪降る春」

③箱崎りえ「雲の信号」

※佳作7点

■写真の部

審査員：齋藤康一（写真家）

一般応募：204点（内、青少年2点）

展示点数：207点（一般204点、招待3点）

三賞受賞者：

①柏館 健「郷愁」

②横山もと子「やんちゃ姫」

③大津賀禮子「海岩模様」

※佳作23点

◇部門の開催順序について書の部から始まるように変更になった。これは、書の部から、「現状では中央の展覧会と市美展の日程が重なる部会員が多く、準備等に不都合なため書の部から始まりたい」との申し入れがあったことによる。

・写真の部から募集要項で条件としている「未発表の創作作品に限る」について、より明解にしてほしいとの要望があり、公募要項で次の文言を追加した。

「他の公募展等に入賞、入選した作品は出品してはならない。」

（書）第5回展の書の部創設時から同部を牽引してきた佐々木部会長が、運営委員会後に亡くなられ、遺作展示が行われる。

・大勢の生徒を指導していた佐々木部会長が亡くなられたこともあり、一般応募が昨年比で25点減る。

・委嘱作家の鈴木花泉が、実績等が評価され招待作家となる。

・軸装について青少年（20歳未満）の場合は、仮表装を認めることになる。

（絵、彫）招待作家の舟生厚が亡くなられ、遺作展示が行われる。

・20～40代の出品者が少ないことが問題となり、積極的に若い人に出品を促していくことになる。

（陶）震災後にいわきを拠点にしている大堀相馬焼の近藤学と近藤賢が、県展等での実績により招待作家となる。

・展示において袱紗の使用は高台が見えづらく良くないなどの意見があり、反省会で協議の結果、次年度以降は使用を禁止とする。

・陶芸の部企画の事業として、3月7日に1階ロビーにおいて、自分たちが作った茶碗や道具を用いた呈茶会を「裏千家淡交会いわき支部」の協力を得て開催した。75人以上の参加者があり、好評を博した。呈茶券は500円で和菓子が付いた。こうした呈茶会は市内の茶道団体の協力を得て、その後も続けられている。

（写）肖像権の問題があり、募集要項の規格に次の文言を追加する。

「※被写体の人物には、事前に承諾を得られたものとし、肖像権の侵害等が生じないよう応募者本人の責任において確認の上で応募のこと。」

【第45回展】

■会期 平成28（2016）年

書の部 2月5日（金）～2月14日（日）

絵画・彫塑の部 2月20日（土）～2月28日（日）

陶芸の部 3月4日（金）～3月13日（日）

写真の部 3月4日（金）～3月13日（日）

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第40回展と同じ

■書の部

審査員：石川大湊（長）、松崎秋香、細井研堂、鈴木花泉

一般応募：131点（内、青少年16点）

展示点数：155点（一般131点、招待18点、委嘱4点、遺作展示2点）

三賞受賞者：

①井戸川保子「金葉集のうた」

②春日賢治「永平広録」

③吉村翠苑「杜甫詩」

※佳作20点、青少年賞2点

■絵画・彫塑の部

審査員：木原正徳（二紀会委員、東北芸術工科大学教授）

一般応募：184点（内、青少年16点）

展示点数：200点（一般184点、招待16点）

三賞受賞者：

①四家友幸「自然の怒り」

②根本裕之「地殻変動」

③江尻敏昭「祈り 天空への道」

※佳作15点、青少年賞1点、青少年奨励（X）賞2点

■陶芸の部

審査員：寺本 守（陶芸家）

一般応募：128点（内、青少年7点）

展示点数：139点（一般128点、招待11点）

三賞受賞者：

①鈴木ゆかり「育ち始めた『繊細な大胆』」

②増井やよい「流麗」

③荻野イチ子「彩」

※佳作7点、青少年賞1点

■写真の部

審査員：金子美智子（写真家）

一般応募：187点（内、青少年3点）

展示点数：190点（一般187点、招待3点）

三賞受賞者：

①根本隆意「耐える」

②長谷川清夫「めんこいネ」

③齋藤吉久「風雪と舞う」

※佳作23点

◇（書）石川大滙が部会長となる。

- ・新妻淡遠がポイントを重ね委嘱作家となる。
- ・招待作家の鈴木胡秀と吉田汀秀が亡くなられ、遺作展示が行われる。
- ・書を手掛けている人間がどういうことをしているのかを、多くの方に見てもらおうことを目的の一つに、招待作家による席上揮毫が行われた。これはその後も続けられている。

（陶）秤屋苑子が部会長となる。

- ・箱崎りえがポイントを重ね招待作家となる。
- ・3月5日に「宋偏流福島南支部」の協力を得て、呈茶会が開催された。
- ・作品を触って鑑賞できるようにと、「タッチコーナー」の催しを実施した。これはその後も続けら

れている。

- ・20歳未満を対象に青少年賞が新設される。

【第46回展】

■会期 平成29（2017）年

書の部 2月10日（金）～2月19日（日）

絵画・彫塑の部 2月24日（金）～3月5日（日）

陶芸の部 3月10日（金）～3月19日（日）

写真の部 3月10日（金）～3月19日（日）

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第40回展と同じ

■書の部

審査員：村上皓南（長）、田辺碩声、滝翠嶺、芳賀二葉

一般応募：116点（内、青少年6点）

展示点数：137点（一般116点、招待21点）

三賞受賞者：

①樋田静流「静貞銘」

②伊藤松茄「臨天長前漢簡」

③井戸川保子「旅」

※佳作16点、青少年賞1点

■絵画・彫塑の部

審査員：河内成幸（版画家）

一般応募：191点（内、青少年25点）

展示点数：204点（一般191点、招待12点、遺作展示1点）

三賞受賞者：

①鈴木儀一「CORROSION '17- I」

②平子貞男「想」

③佐藤沙月「秋霖の中」

※佳作15点、青少年賞1点、青少年奨励（X）賞1点

■陶芸の部

審査員：橋本昌彦（陶芸家）

一般応募：143点（内、青少年11点）

展示点数：155点（一般143点、招待12点）

三賞受賞者：

①樋田和代「釉裏紅搔落文大鉢」

②新井節子「御影焼縮め花入」

③蕪木良子「万葉の黒船」

※佳作10点、青少年賞1点

■写真の部

審査員：中村征夫（写真家）
一般応募：201点（内、青少年3点）
展示点数：204点（一般201点、招待3点）
三賞受賞者：

- ①小野貞夫「波濤暮色」
 - ②増井やよい「佳穂10才」
 - ③上原久子「ポニーの詩」
- ※佳作21点

◇（絵、彫）招待作家の蛭田誠が亡くなられ、遺作展示が行われる。

・第34回展から、開幕までに入落通知が出品者に届かない場合の不都合を考え、他の部門に比べて1日遅い土曜日始まりの全8日間としていたが、従来のように金曜日始まりの全9日間の会期に変更となる。

（書）委嘱作家の宮崎雪虹、小松遊苑、物江虹唐、金成晁泉の4名が実績等が認められ招待作家となる。

（陶）児玉良介が会長となり、48回展まで務める。

・3月11日に「表千家同門会福島県支部浜方部」の協力を得て、呈茶会が開催された。

【第47回展】

■会期 平成30（2018）年

書の部 2月9日（金）～2月18日（日）
絵画・彫塑の部 2月23日（金）～3月4日（日）
陶芸の部 3月9日（金）～3月18日（日）
写真の部 3月9日（金）～3月18日（日）

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第40回展と同じ

■書の部

審査員：遠藤昌弘（書家）
一般応募：110点（内、青少年8点）
展示点数：131点（一般110点、招待21点）
三賞受賞者：

- ①樋田静流「大盂鼎之一節」
 - ②阿部嶋泉「島崎藤村の詩」
 - ③臺 麗子「鶯」
- ※佳作15点、青少年賞1点

■絵画・彫塑の部

審査員：佐治ゆかり（郡山市立美術館長）
一般応募：188点（内、青少年22点）

展示点数：199点（一般188点、招待11点）

三賞受賞者：

- ①高木武廣「標本箱シリーズ『思索する無意識』」
 - ②佐藤吉尚「秋の頃」
 - ③佐々木寿子「She has a pure heart」
- ※佳作15点、青少年賞1点、青少年奨励（X）賞1点

■陶芸の部

審査員：藤原郁三（陶芸家）
一般応募：108点（内、青少年23点）
展示点数：119点（一般108点、招待11点）
三賞受賞者：

- ①芳賀明美「風と葉」
 - ②阿部新一「御影練込焼縮花生」
 - ③荻野イチ子「彩 2018」
- ※佳作7点、青少年賞2点

■写真の部

審査員：鈴木一雄（写真家）
一般応募：180点（内、青少年0点）
展示点数：181点（一般180点、招待1点）
三賞受賞者：

- ①岡 光明「夜明けの散歩」
 - ②太田昭子「晩夏」
 - ③柏館 健「国宝を守る」
- ※佳作20点

◇作品募集要項の応募資格で、いわき市出身者について、「（過去に在住・在勤・通学経験者含む）」と追記し、いわき市出身者の意味を明確にし、出品しやすいようにする。

（書）委嘱作家の新妻淡遠と、ポイントを重ねた井戸川保子が招待作家となる。

・書の部の審査は、従来の招待作家4名による合議制ではなく、他部門と同様に市外で活躍する一人の書家が行うことになる。

（陶）ポイントを重ねた樋田和代が招待作家となる。

・3月10日に「安藤家御家流いわき会」の協力を得て呈茶会が開催された。

（写）写真の部創設時から中心になって活動してきた前回までの部会長の上遠野良夫が招待作家、部会員を辞退する。永山淳が会長となる。

【第48回展】

■会期 平成31(2019)年

書の部 2月8日(金)～2月17日(日)

絵画・彫塑の部 2月22日(金)～3月3日(日)

陶芸の部 3月8日(金)～3月17日(日)

写真の部 3月8日(金)～3月17日(日)

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第40回展と同じ

■書の部

審査員：遠藤昌弘(書家)

一般応募：91点(内、青少年4点)

展示点数：115点(一般91点、招待23点、審査員特別出品1点)

三賞受賞者：

①佐藤景苑「臨虎溪山前漢簡」

②臺 麗子「鶯」

③片寄光月「李白詩」

※佳作13点、青少年賞1点

■絵画・彫塑の部

審査員：秋元雄史(東京藝術大学大学美術館長・教授、練馬区立美術館長)

一般応募：193点(内、青少年24点)

展示点数：206点(一般193点、招待13点)

三賞受賞者：

①神保隆三郎「平和への飛翔」

②中塚將太「波動」

③高木武廣「標本箱シリーズ『入院生活・チューブのある風景』」

※佳作14点、青少年賞1点、青少年奨励(X)賞1点

■陶芸の部

審査員：井口雅代(陶芸家)

一般応募：117点(内、青少年22点)

展示点数：129点(一般117点、招待12点)

三賞受賞者：

①伊藤由季子「睡蓮日和」

②荻野イチ子「彩 2019」

③佐藤淑子「金彩花器」

※佳作7点、青少年賞2点

■写真の部

審査員：三好和義(写真家)

一般応募：180点(内、青少年11点)

展示点数：182点(一般180点、招待2点)

三賞受賞者：

①遠藤文夫「人馬一体」

②江尻利一「朝焼の五月田」

③田代雅一「冬歩」

※佳作18点

◇前回展の写真の部で、他の公募展で受賞したのとほぼ同じ作品が出品され受賞したことが問題となったこともあり、募集要項において「類似作品は出品できない」との規定が追加された。また、前回展の絵画・彫塑の部の反省会での問題提起を受け、「展示室の環境に悪影響を及ぼすもの(腐敗、悪臭、生物等)、および不法なものは出品できない」との規定も追加された。

(書) 樋田静流がポイントを重ね招待作家となる。

・近年、高齢化等の理由により、一般応募が減少傾向にあったが、今回は二ケタの91点となってしまった。最盛期の第26回展は278点であり、比べると約1/3になったことになる。

・会期中の催しとして、「高校生による書道パフォーマンス」が行われた。磐城高校書道部員による音楽を流しながらの若々しいパフォーマンスは、新風を吹き込むとともに会場を盛り上げ、好評を博した。次年度も開催されることになった。

(陶) 3月9日に「裏千家淡交会いわき支部」の協力を得て呈茶会が開催された。

(写) プロとしての実績により増井治が招待作家となる。

【第49回展】

■会期 令和2(2020)年

書の部 2月7日(金)～2月16日(日)

絵画・彫塑の部 2月21日(金)～3月1日(日)

陶芸の部 3月6日(金)～3月15日(日)

写真の部 3月6日(金)～3月15日(日)

■会場 いわき市立美術館

■主催、後援、協力は第40回展と同じ

■書の部

審査員：吉澤鐵之(書家)

一般応募：79点(内、青少年2点)

展示点数：102点(一般79点、招待21点、遺作展示2点)

三賞受賞者：

- ①馬上溪花「廉頗藺相如列伝」
- ②丹野清波「陳緝詩」
- ③藤田桂雪「静慮」

※佳作14点、青少年賞1点

■ 絵画・彫塑の部

審査員：遠藤彰子（画家、武蔵野美術大学名誉教授）

一般応募：195点（内、青少年19点）

展示点数：205点（一般195点、招待10点）

三賞受賞者：

- ①中塚將太「未来への渴望」
- ②四家友幸「宇宙速度」
- ③佐藤沙月「大地に宿る」

※佳作16点、青少年賞1点、青少年奨励（X）賞1点

■ 陶芸の部

審査員：筒井 修（陶芸家）

一般応募：105点（内、青少年14点）

展示点数：116点（一般105点、招待11点）

三賞受賞者：

- ①横須賀政雄「七輪」
- ②横山 猛「T O K Y O 2020」
- ③芳賀明美「風と葉 一 奏」

※佳作9点、青少年賞1点

■ 写真の部

審査員：藤森邦晃（フォトコン編集長）

一般応募：173点（内、青少年0点）

展示点数：175点（一般173点、招待2点）

三賞受賞者：

- ①小泉 裕「特等席」
- ②江尻利一「夕日差込む」
- ③高木志津夫「洗濯日和」

※佳作22点

◇前年の秋に台風による水害等があり、夏井川流域の小川・平窪地区、好間側流域の好間地区など、いわき市は大きな被害を受けた。書の部では一般応募が昨年と比べて12点減り、その影響があったのかも知れない。

・2月以降、国内において新型コロナウイルスの感染者が拡大し、3月には市内においても感染者が確認されたこともあり、感染予防・拡大防止のため次の事業が中止となった。陶芸の部の「呈茶

会」と「タッチコーナー」、写真の部の「招待作家による作品解説会」、および両部門の表彰式。

・観覧者数は、新型コロナウイルスの影響があり、例年に比べて少なかった。

（書）審査員を市外から招き始めて3回目となり、入賞者の顔ぶれが従来とは変わり、これまで受賞できなかった人が入賞して良かったとの声が寄せられた。一方で、審査員は地元のことが分かっている招待作家が従来のように行う方が良いとの声も寄せられた。

・臺麗子がポイントを重ね招待作家となる。

・昨年に引き続き磐城高校書道部の協力を得て「高校生による書道パフォーマンス」が行われた。今回は二組のパフォーマンスが行われ、「招待作家による席上揮毫会」と同じ日であったこともあり、昨年以上に盛り上がった。

・招待作家の神林東伸と細井研堂が亡くなられ、遺作展示が行われる。

（絵、彫）市長賞は22歳、教育長賞は20歳の若者が受賞した。この二人はすでに議長賞や教育長賞をとっており、近年における若い世代の台頭を印象づけた。

（陶）新谷辰夫が部会長となる。

（写）青少年の応募が昨年比で11点減ってゼロとなる。若い人たちの間で写真が手軽なものとなっているだけに少し残念な結果となった。

【第50回展】

■ 会期 令和3（2021）年

書の部 2月5日（金）～2月14日（日）

絵画・彫塑の部 2月19日（金）～2月28日（日）

陶芸の部 3月5日（金）～3月14日（日）

写真の部 3月5日（金）～3月14日（日）

■ 会場 いわき市立美術館

■ 主催、協力は第40回展と同じ

■ 後援（財）福島県報徳社 福島民報社 福島民友新聞社 いわき民報社 NHK福島放送局 ラジオ福島 福島テレビ 福島中央テレビ 福島放送 テレビユー福島 FMいわき

■ 審査員

書の部：吉澤鐵之（書家）

絵画・彫塑の部：榎木野衣（美術評論家、多摩

美術大学教授)

陶芸の部：佐伯守美 (陶芸家)

写真の部：野町和嘉 (写真家)

【第50回記念事業】

- ・(書)「特別展示：佐々木折柴、村上皓南、田久奇峰、綿引千斎」
- ・(絵、彫)「特別展示：若松光一郎、吉田富美、松田松雄」、「絵画・彫塑の部特別賞の設置」
- ・(陶)「特別展示：歴代市長賞受賞作家の作品」
- ・(写)「特別展示：歴代市長賞作品」

【歴代招待作家】

※ (~) 内は招待作家として出品した最初と最後の展覧会を意味する。例えば、(1~10) とあれば、招待作家として最初に出品したのが第1回展で、最後が第10回展である。ただし、最後が遺作展示の場合もある。また、最初と最後の間に不出品の年がある場合や、最後の後も招待作家であったが出品されなかった場合もある。

なお、ここでは、絵画・彫塑の部は第21~37回展の間に、写真の部は第24~39回展の間に無鑑査作家として、書の部は第34~45回展に委嘱作家として出品したものも含めている (※無鑑査作家と委嘱作家は、その当時、一般出品と招待との間に設けられた。ただし、写真の部では一般出品と無鑑査しかなかった)。

同一人物で名前が変わる場合、変更後の名前になるべく統一している。

招待などの資格は県展や中央での実績等のある人や、市美展での上位入賞でポイントを獲得した人が得られ、最終的には毎回の運営委員会で決定される。ポイントは、市長賞が2、議長賞と教育長賞が1として、合計4ポイントを獲得すると招待などの資格を得る。ただし、未発表の新作を出品するという規定を守らない場合や、過去数年間において未出品の場合には、招待作家として推薦されないことがある。

■絵画・彫塑の部

- 遠藤正三 (1~12)
- 大和田タダ子 (1~18)
- 近藤広記 (1~6)
- 坂本 剛 (1~1)
- 塩田清忠 (1~45)
- 高瀬勝男 (1~7)
- 但野博貞 (1~2)
- 中西一路 (1~3)
- 菱沼 儀 (1~4)
- 船山一衛 (1~25)
- 松田松雄 (1~20)
- 若松光一郎 (1~25)
- 阿部セキ (2~29)
- 坂本 勇 (2~)
- 吉田富美 (2~31)
- 北郷喜三郎 (3~34)
- 佐藤英吉 (3~13)
- 鈴木邦夫 (3~45)
- 広沢栄太郎 (3~3)
- 馬上幸男 (3~31)
- 伊沢賢一 (4~39)
- 熊坂太郎 (4~22)
- 中村亨司 (4~)
- 北郷 悟 (10~)
- 舟生 厚 (10~42)
- 山野辺日出男 (10~12)
- 高杉和久 (14~33)
- 石井 實 (15~)
- 天野和雄 (16~)
- 緑川宏樹 (16~27)
- 峰丘 (16~)
- 渡辺文雄 (16~)
- 石川 進 (19~)
- 広瀬 論 (22~)
- 宮田英子 (22~43)
- 稲川敏之 (25~36)
- 猿橋喜一 (27~28)
- 安斉重夫 (30~)
- 小滝勝平 (30~)
- 吉田昭男 (30~)
- 柳内憲治 (31~)
- 安藤榮作 (33~)
- 湖月健太郎 (35~41)

木村健治 (36～43)

蛭田 誠 (40～46)

■書の部 (書の部は第5回展から始まる)

石川 稔 (5～30)

小野寺峰堂 (5～31)

後藤桂仙 (5～38)

酒井泰舟 (5～)

佐々木折柴 (5～44)

鈴木胡秀 (5～45)

田久奇峰 (5～39)

田辺追牛 (5～25)

村上皓南 (5～)

綿引千斎 (5～29)

石川大湊 (7～)

田辺碩声 (8～)

園部秋月 (9～43)

雅楽川一睡 (10～19)

清水桂心 (10～22)

荒井東苑 (12～)

菅野桂洞 (13～36)

矢内 齊 (13～)

滝 翠嶺 (15～)

吉田汀秀 (16～45)

神林東伸 (17～49)

田久芳涯 (17～)

芳賀二葉 (17～)

川島大桂 (19～)

松崎秋香 (21～)

渡辺大雅 (21～40)

谷津彤雲 (26～)

齋藤柳史 (27～29)

高久香扇 (28～)

細井研堂 (29～49)

金賀香楓 (30～)

馬目香楊 (30～)

齊藤王寧 (31～31)

木田湛周 (32～)

永山閑遠 (33～44)

鈴木我峻 (34～39)

細井清子 (35～40)

大河原一醉 (37～44)

鈴木花泉 (37～)

小松遊苑 (40～46)

宮崎雪虹 (40～)

物江虹唐 (41～)

金成晁泉 (42～)

草野蘆舟 (42～)

新妻淡遠 (45*)

井戸川保子 (47～)

樋田静流 (48～)

臺 麗子 (49～)

■陶芸の部 (陶芸の部は第24回展から始まる)

青木一男 (24～24)

新谷辰夫 (24～)

新谷文代 (24～)

秤屋苑子 (24～)

本多博史 (24～24)

緑川宏樹 (24～28、40)

星 尚子 (29～)

児玉良介 (31～)

斉藤浩子 (31～)

鈴 忠壽 (34～)

佐藤俊之 (35～)

菅野征市 (38*)

大谷 巖 (39～)

平子貞男 (41～)

山川博士 (43～)

近藤 学 (44～)

近藤 賢 (44～)

箱崎りえ (45～)

樋田和代 (46～)

■写真の部 (写真の部は第24回展から始まる)

今井速水 (24～34)

上遠野良夫 (24～46)

山口忠重 (24～43)

上遠野真人 (39～)

吉田精利 (39～)

増井 治 (48～)

※ 49回展までのデータである。

※ *印は、その回の市美展から招待となったが、招待作家としては未出品を意味する。

※ () 内の3つ目の数字は、招待作家としての最後の出品から数年以上経ってから、遺作展示がされたことを意味する。

再録（これまで美術館ニュースなどに寄せられた文章から）

【「美術館ニュース」³⁴ 2001. 03. 25】より】

■市美展30周年によせて

鈴木邦夫（絵画・彫塑の部 部会員）

いわき市民美術展が30周年を迎えましたこと誠に同慶の至りであります。第1回展は昭和46年10月12日から15日まで、現在の市民会館で開催されました。出品数163点、招待12点、市長賞上野武夫、審査員角浩、審査評は「個性的で模倣的な作品は少なく若い人のユニークな作品が目立った」とあります。

第2回展、市民会館、市長賞小生私が。会場は4回展まで市民会館。会場へのパネル設営など苦勞の記憶はありませんが、県展の会場も平二小の体育館に暗幕を張って設営された訳ですから、結構大変だったと思います。

こんな訳で「このまちにも文化センターを」と署名運動が始められましたのが、第1回市美展あたりからだったと思います。私たちも署名をいただくため駆け廻りました。そしてようやく建設決定となり、設計事務所の方から創作室の水道の位置、コンセントの数など希望を聞かれたのを覚えております。当時としては白亜の殿堂でした。市美展は第5回展から文化センターとなった訳です。

その後間もなく常磐炭鉱閉山の記念品展示、フタバズキリュウの展示、昔の農具の展示、遺跡からの発掘品展示のための施設が必要ということになりました。場所はニュータウン、そしてその中に市立美術館も入れるということです。委員会が設置され、美術関係では若松光一郎先生と私、2回目の会議で美術館は多少時期は遅れてもよいから単独で建設して貰わなければならない、とその理由を述べ3回目からは出席しませんでした。私たちが外れたせい、その後他部門からも積極的な意見は出ず、流れ解散となったようです。結果的には石炭化石館、くらしの伝承郷、考古資料館そして市立美術館が独立して建設されてよかったと思っていますところ。

市美展が30周年を迎えられたことは、先輩諸先

生方の苦勞と努力があったことを忘れてはならないと思います。第1回展の招待作家も12名のうち8名が故人となられました。この先生方にどう報いたらよいのか、それは私達が常に勉強を忘れないこと、切磋琢磨して美術に取り組むこと、マンネリ化しないように常に先を見据えて努力することだと思っています。

最後になりますが「人は美を崇拜している内に自ら完全な人になる」という私の好きなダンテのことばを使わせていただきおわりといたします。

■いわき市美展「書の部」の歩み

村上皓南（書の部 部会員）

昭和46年、いわき市美展が第1回展を開催して以来、今年で30回展を迎える。

「書の部」は第5回展から参加、当時市美展事務局より「書の部」参加の要請があり、はじめてのこととて皆目見当がつかず、県展招待作家でいわき在住の4名が発起人となり、相談を重ねた結果、県展の機構を見倣い、それに準じていわき市美展書の部の機構をつくり発足することとなった。従って、県展招待作家4名とそれに県展委嘱作家6名を加え、10名を招待作家とし、一般出品者の中より実行委員を選抜、運営に当たることとなったのである。

当時の市美展会場は、市文化センターで、書の部は後期開催であった。昭和60年1月第14回展より、いよいよ待望のいわき市立美術館が会場となって以来、書の部は前期開催となり今日にいたっている。

昭和の年号が変わり、平成2年、いわき市美展が20回を迎えるに当たり、20回展記念事業の一環として、書の部は「中国名家書画文房展」を開催展覧し、市民の大きな反響をよんだのである。今でもその図録が机案にあり、時に頁をひもとき、書の本質に触れた当時のよろこびに浸っている。

東北の一地方市にすぎない、いわき市美展が、書画骨董など約四百数十点余、数もさることながら、内容も高く立派なものが、よくもまあこれだけ一堂に集まったものだと感激したことを覚えている。

この「中国書画文房展」の図録は、県内はもとより県外にも多数贈られ、大変感謝された。わが師匠で、文化勲章を受章、日本芸術院会員であっ

た青山杉雨先生にお贈りしたところ、「田舎でこれだけ内容のある図録を出すということは大変だったろう」とねぎらいのお言葉をいただき、恐懼感激した思い出が甦ってくる。

そしてこの度、平成13年、いわき市美展が30回の大きな節目を迎えた。事務局よりなにか30回記念行事をやってほしいと要請があり、書の部では、招待作家全員による「実技公開」を行うことに決まった。2月11日、美術館ロビーを会場に、13時より15時まで、半紙部・条幅部と2班にわかれ、1時間交替で実技公開が行われた。はじめての行事なのでどうなることかと心配したが、当日開催時間が迫ってくるにつれ、参観者が会場に満ちみちて、自然に書く人の気宇が昂り、観る人と渾然一体となって、会場は熱気をはらみ盛り上がりを見せた。参観者より、毎年実技公開をやって欲しいなど強い要望があり、成功裡に終了した。

いわき市美展「書の部」は、篆・隸・楷・行・草・かな・現代詩文・近年出土の木簡体等、広く書体を網羅し、加えて、書風もまた多種多彩を極め、県内各地はもとより、隣接する近県からも多くの参観者があり、内容の充実と高さに注目を集めている。

文化とは、いわば木の年輪のようなもので積み重ねである。われわれ書を志す者もたゆむことなく、努力精進を続け、次代のいわきに、香り高い書の文化を、そして、肥えた豊かな書の土壌を残す責務があるやに思われる。せんじつめれば、市美展の役目もまた同じであるといえよう。

■陶芸部門市美展初参加のころ

新谷辰夫（陶芸の部 部会長）

平成4年10月に「いわき陶芸協会」が百余名で発足し、以降毎年文化センターを会場とし陶芸協会展を催し会員の発表の場としてきました。

会長に就任された緑川宏樹氏から「市美展にもそろそろ陶芸部門があっても良いのではないか？」という提案があり、話は一気に盛り上りを見せました。

市美展加入に向けて陶芸協会役員が運営委員となって、美術館長はじめ学芸員の方々と会合を持ち助言を頂きました。

平成5年10月15日に同じく新設加入を希望していた写真部門と合同で運営委員会を行い、署名を

集め、10月26日に市長室と教育長室へ陳情に上がりました。その内容の一部です。『…陶器は、私たちの暮らしに欠くことのできないものであり、また永い歴史をもっております。土と炎によって作り出される陶器のなかに、創る人の心情が吹き込まれ、陶器を通じて心が通い合う心の表現であります…。』

そして念願の両部門新設が、第24回市美展で実現したのでした。期間は平成7年3月10日から10日間で、伊藤公象氏を陶芸の審査員としてお招きし、その結果市長賞に選ばれた独自性のある作品が印象的でした。

出品数は、一般75点、招待6点、特別招待2点の計83点でした。

中でも、長らくこの地でご活躍、ご指導下された故新妻晴夫氏、同じくその年2月に他界された緑川卓志氏、そして市美展直前に急逝された運営委員でもあり招待作家の青木一男氏、この3作品は心に残る悲しい展示となってしまいました。

このような経緯で初めての市美展参加となりました。

当時陶芸協会々長の緑川氏、美術館学芸員の方々、運営委員の皆様、積極的に参加して下さった本多博史氏、それに新設に携われた多くの方々の努力に感謝いたします。

■市美展キャンパス

すずき さく（絵画・彫塑の部 出品者）

市美展のキャンパスは今も輝いているのだろうか。

否、輝いているからこそ、30年の時間を保ち続けていると信じている。

おめでとう、30年市美展！そして、30年の歳月に感動の種を播いていただいたことにありがとう！

この間、私も一度だけ市美展の事務を行ったことがある。会場がまだ文化センターの頃であった。（歴史を感じるネ…うん）

市美展の讃歌は市民一人一人の手によって生まれてくるものと肌で感じとることもできた。

それまでは鑑賞者の一人だったので、会場までの過程を知る由も考えることもなかった。

しかし、事務をしてみると、市美展のクライマックスは作品が審査される場所にあるのがわかっ

た。審査員に選ばれる作品の展示が決定されるのであるから、ワクワク、ドキドキのボルテージが上がったことを、今でも鮮明に憶えている。

また、作品の出品者として、絵を描くことの刺激を味わっている私が、たびたび入選することよりも、市美展に参加することに、意義があることを実感している。

絵を描くということはモチーフの工夫や空間の処理の仕方を学ぶことであって、今までの自分がないものを引き出してくれる楽しみがある。

色彩もまた、その線上にあって、普段、見慣れてない色づかいにも注意を払うことがあり退屈がない。

デッサンすることも一つの勉強となり、手を動かしていることから、おもしろい絵も出来上がる。心の自由を楽しむことができるのも絵画のよさである。市美展に出品できる者としては、これからもいわき市美展が継続されることを強く希望します。

■若いエネルギーの凝縮・落選四人展

吉田重信（絵画・彫塑の部 部会員）

最近、友人を通じて知り合った人達と新年の席を一緒にしたとき、落選四人展の事が話題になった。当然、彼らは16年前のこの件を知るよしもない年齢なので、落選展の事の起りと展の内容を説明したところ、美術と無縁の彼らは落選展のインパクトや行動に興味をしめしてくれて話が盛り上がった。

その落選展とは、第14回いわき市民美術展に落選した石川貞治、鈴木サク、野口孝寛、吉田重信の4人が集まり、「審査の不満を語るより自分達の表現を市美展と同時に見てもらおう」と考えたのがきっかけだった。会場は、椿屋の御主人に企画と内容を理解していただき、同ギャラリーで開催した。市美展始まって以来のこの事件は、「いわき市美展落選四人展」の広告を4人の顔写真入りで、新聞に掲載した影響も手伝って、会場に多くの方が訪れ賑やかな展覧会になった。

今でも市美展の審査に不満の声が聞こえることがある。昨年別部門で問題があったように聞いている。16年前も現在も少なからず問題はあつた。しかし、私は現在のシステムを決して批判するつもりはないし、16年前も同じ考えであった。

落選展は審査に対する不満と言うよりも、若いエネルギーの凝縮が落選展開催につながったと思っている。そして、自分の中に疑問があれば納得の行く形で作品を発表する正直な行動であったと考えている。どのような公募展にも制限や矛盾したシステムはある。団体展が表現の場の全てではないことに気づけば、作品を発表する方法は自分で考えるべきである。それが前進するエネルギーになるのではないだろうか。

私にとって落選展は、現在の活動を支える原点のひとつである。若い人達の中で話題になったり、原稿依頼も来る程に、インパクトを残したグループ展であったことがとても嬉しい。今年は、しばらくご無沙汰していた市美展に落選覚悟で出品しようと考えている。

■市美展

安藤栄作（絵画・彫塑の部 出品者）

決して地方のローカル作家として収まらない。そのためには地方都市の市民美術展には出品しない。

自分は美大出の本格派なのだから趣味で制作している人と一緒にしてもらいたくない。いわきに移り住んだ当初の私は、そんなプレハブのようなプライドで身を固めていた。

毎年、年に数回、全国公募のコンクールに応募していたが、ことごとく落選だった。彫刻をして生きていこうと思うことは、たんなる私のわがままで、思いあがり、甘えなのだろうか。どこまでも気持ちがなえていくような感覚だった。

世の中の多くのことと同じように芸術にもレベルやランクや段階があって、今自分はどの段階なのだろうと焦ってもいた。

初めて市美展に出品したのは、市長賞を取ると買い上げになることを耳にしたからだ。苦しい生活をなんとかしたくて、やむなく応募したのだが、本心は生活のために、そこまで自分のレベルを下げなければならないのかと屈辱的な気持だった。こんなローカル美術展で落選したらどうしよう。びくびくしていた。数日して入選の通知がとどいた。

春の日差しを背中に受けたようだった。あれから10年たち、市美展にも7回出品している。初出品した頃と私の気持はずいぶん変わってしまっ

た。勝ち続けて強い側に立とうとふんばるのだけれど、結局いつも負け続けて、気がついたら弱い側に立っていた。プレハブプライドがパタパタとたおれて生身の自分が立っているだけになってしまった。

趣味でも願いを込めて一生懸命描かれた作品、ざっくりして、誠実な魂によって描かれた高校生の作品、ベテラン達の本気で取り組んだ作品、そういった作品達が同じ土俵に並んでいる楽しさ。作品を創造した心やスピリットにランクもレベルもない。

市美展は宇宙や世界や人間を祝福する魂が集った場だ。私はそのことがとてもうれしい。

■市美展の問題点について

稲川敏之（絵画・彫塑の部 無鑑査作家）

友の会広報部からこのテーマで意見を求められた。市美展は、書、絵画・彫塑、陶芸、写真の各部門にわかれていて、私は絵画・彫塑の部の一出品者であるので他部門のことは不明である。従って絵画・彫塑の部のみ感じていることを述べたいと思う。

1. 審査について

審査によって入選落選が決められる。毎年落選は全体から見て極めて少ない。審査員の感性に合わない作品は結果として疎外される。以前それに対する批判として落選展を開いた人達もいた。著名な作家と雖も偏見皆無というわけにはいかない。まして一人で絵画のみならず彫塑まで審査する義務を負わせている。或る程度までは信頼出来ると推察するが絶対ではない。その絶対ではない隙間で落選した人の悔しさに思いをはせる。私が提案したいのは、市民によって建てられ、市民のための美術館に途中の斟酌なしに市民の作品が展示されることである。展示スペースが限られていて不可能というかもしれないが二段掛も出来るし、常設展示室もその期間使用すればよい。道路をへだてて文化センターの展示室もあるではないか。文化センターは圏域が違うというのは、行政はタテ割りですとっていることで、市民のためというの選挙用スローガンでしかない。足りないのは関係者サイドの工夫である。

2. 批評について

現行では落選作品・入選作品共に批評はない。

特に落選作品については、必ずどうして選外になったのか適切な指導があるべきと考える。搬入し、落選通知のハガキのみで引導をわたされ、それで終りでは浮かばれない。来年からは二度と市美展なんかに出すものかとなる。又、展示された作品にも批評会はない。皆、自分の仕事の向上を願って精進している。この一年に一度の機会に指導的立場の人は手を貸すべきと思う。

3. 経理（出品手数料）について

出品手数料として一般1500円、青少年は500円を収めている。受益者負担は当然のこととも考えられるが、市はこれを援助して無料としたい。市民文化の向上のための支出は目に見えないが、人材に対しての公共投資であることを知って欲しい。現行のままとするならば、公的に開催しているのであるから事後会計報告はきちんとすべきである。私は今までその収支決算報告書を見たことがない。

■祝・第30回市美展

峰丘（絵画・彫塑の部 部会員）

「市美展」が30回を迎えた。第1回から出品を続けている人達もいて、今まで市美展を引っ張ってこられた諸先輩の皆様に敬意を表したい。私は何度か関西や関東の地方都市で審査を頼まれたが、比較すると、いわき市の美術人口は多く、市美展の質は高い。

出品作の入落のこともあるが、やはり、いわき市の場合、市民運動から美術館ができて、各種の展覧会による影響は相当なものとする。市民は収蔵品を含めたひとりひとりの美術館としてもっと誇りを持つべきだと思う。

15回展の時、私は市長賞をいただいた。足かけ11年のメキシコ生活にひとつのピリオドをうち、いわきにもどってまもなくのことだった。出品作は、帰国前メキシコ国立芸術院の招待で2ヶ月間という大きな個展をした時の作品だった。その当時は市美展には余り興味がなかったように思う。受賞式に遅刻したりして、何となくばつが悪かったのを思い出した。市長賞との電話を受け、嬉しさよりも買い取りの賞金の少なさに驚いて賞を返上した。買い取りのない次の賞にして欲しいと言った覚えがある。知らなかったとはいえ出品者としては迂闊だったが、その件で当時の館長や役

員の方々に余計な会議までさせて、今から思うと赤面の至りである。(前例がないとのことで、市長賞はもらうことになった。)

今年も搬入の受け付けの時、絵画なのか、彫塑として扱うのかと同じようなことで何度かもめたが、来年からは平面か立体という広い範ちゅうで考え直した方がいいのではないかと思う。絵画・彫塑の部を平面・立体の部に変更することを提案したい。展示面積が狭い理由での落選があり、受賞した人が翌年落選するという、毎年変わる審査員のことなど問題が残るが、市美展はいつまでも美術を愛する人達の実験工房のような展覧会であって欲しい。最後に出品者の中から、いわき市を越え、福島県を越え、国境を越えるような仕事をする作家が育つことを強く望む。

【「美術館ニュース」(1998. 3. 25)」より】

■ザ・市美展—陶芸部門— 緑川宏樹(陶芸の部 部会長)

いわき市民美術展覧会に「陶芸の部」と「写真の部」が共に加えられたのは、平成7年の第24回展からである。

市民美術展覧会に工芸部門はあっても、陶芸部門が単独で取り入れられているのは、全国でも数少ない。これは、いわき在住の陶芸愛好者の熱意を団結した「いわき陶芸協会」が平成6年に発足したことに、いわき市長、いわき市教育委員会そしていわき市立美術館が大きな興味と深い理解を示し、新部門の設立に積極的に取り組んでくれたからこそ深く感謝している。

初回の第24回展の搬入点数は83点。審査員・伊藤公象先生(女子美術大学芸術学部教授)による審査の結果、いわき市長賞には吉田重信さんの「地上に墮ちた青い天使」、いわき市議会議長賞には坪内亜希子さんの「てんとう虫の小物入れ」、いわき市教育委員会教育長賞には井上征子さんの「花器」が、それぞれ選ばれた。

2回目の25回展の搬入点数は68点。審査員・宗像亮一先生(宗像窯七代目)による審査の結果、いわき市長賞には伊達義道さんの「灰釉鉢」、いわき市議会議長賞には森大岳さんの「縄文裂器『自然』」、いわき市教育委員会教育長賞には太田太さんの「面取壺」が選ばれた。

昨年の26回展の搬入点数は、60点。審査員・鳥羽克昌先生(走泥社同人)の審査の結果、市長賞に星尚子さんの「遊97-II」、市議会議長賞に根本寿恵子さんの「花器」、いわき市教育委員会教育長賞に井上征子さんの「壺」が、それぞれ選ばれている。

それぞれ審査員の先生方が選ばれた三賞の作品は、私自身は納得できるものであるが、応募者や観客の中には、どうしてあの作品が入賞したのか、と疑問を持たれている人がいるのは確かな様だ。中でも第24回展の吉田君の作品が、なぜ陶芸の部の市長賞なのかと今でも質問されることがある。

アクリルなど“陶”以外のものが作品の素材として使われていたので、陶芸部門の作品ではないのではないかと思われているようである。

現代の美術では、木でも石でも鉄でも自己の着想と形式に見合った材料なり技術を選ぶ自由が与えられている。このような状況の中で、単一の素材で作品を作る作家と肩を並べ、陶と金属など複数の素材を組み合わせて作品を造っている作家も数多い。

つまり、吉田君の作品は、伊藤先生も目録の講評に書いているとおり、れっきとした陶の造形美術と言えるだろう。

土そのものを還帰し、土自体のもつ特性の中に密着した形態の表現を見出した、あのやわらかい肌合いも魅力的であったし、高温で焼いたらおそらく出なかったであろうあの質感も魅力的であった。また、作品の台として使ったアクリルと陶との組み合わせにも彼の優れた構成力を感じた。単に“台”と言っても彼にとっては自分の作品を生かす重要な作品の要素であったのであろう。台の素材・大きさ・高さがいまって、作品として見る側に何ら違和感を与えなかったのは、彼の計算どおりの効果であったと言えるだろう。陶と今にも倒れそうなものが一つになり、見る者に作り手の声が呼びかけているようだ。

陶と台の関係だが、私も30年近く陶のオブジェを作り発表してきた。今まで美術館や、画廊で彫刻用に備えられてある台を使って来たが、彫刻台に陶のオブジェを置くと、台がどっしりと強いのので作品がぼけたようになる。近頃数は少ないが、パイプで組まれた彫刻台を備えてある展示会場もある。このパイプ製の台に陶の作品を載せたら作

品が生きてくる。これは私だけではなく、先輩達も言うことで、わざわざ自分の作品の為にパイプの台を専門家に依頼する人もいるくらいだ。台までこだわり、これまでに妥協を許さなかった吉田君の姿勢はあっぱれと言えよう。

いわき市民美術展覧会「陶芸の部」も今年で4回目を迎えるに当たり、応募点数の減少も気になるが、どんな作品が見られるのか楽しみにしている。いわき市立美術館という大きな場所で、多数の観客の中に自分の作品を置いて、作り手として広い知識と何でも見る目を育てられるよう願っている。

【「美術館ニュース」²⁶(1997. 3. 25)」より】

■ザ・市美展—その成熟と喪失—絵画・彫塑部門篇

田辺恭臣(書の部 部会員, 絵画・彫塑の部 出品者)

今年、第26回を迎えたいわき市美展は、この原稿を書いている時点で絵画・彫塑の部が開催中。今回の一般応募は、絵画の部178点(うち青少年12点)、彫塑の部24点、合わせて202点。昨年より20点増だったという。このうち入選作は、絵画142点(青少年11点)、彫塑20点の計162点。入選率は約80%、40点の応募作が会場展観の資格を得られなかったことになる。その一方で、入賞作品28点中に高校生出品作5点が含まれ、最高賞の市長賞には24歳の大学院生九頭見友行さんが選ばれた。これは前回の市長賞が25歳の女性大学院生だったのに続く特徴となった。結局、会場展観は招待作品(絵画)2点と、無鑑査出品18点(絵画16点、彫塑2点)とを合わせて182点。無鑑査作品中から選ばれる美術館長賞は、塩田清忠氏の抽象作品が受賞した。

さて、こうした絵画・彫塑の部の基本路線というべき公募審査制による枠組みは、昭和46年(1971)の第1回展以来、一貫して行われてきたもの。平成3年(1991)に20回展を記念して「いわき市美展二十年の歩み」展が開催されたが、同展カタログに寄せた当時の部会長若松光一郎氏の「いわき市民美術展に就いて」に、このへんの事情がふれられている。

「審査員は地元やいわき出身者以外の中央画壇で活躍している、実力作家の中から1人を選んで

依頼し、厳正な審査を行って貰いました。どの審査員も現在画壇の錚々たるメンバーであります。絵画部の場合は審査員のお礼の謝金は予算の関係上誠に些少でしたが、お願いした方々は快く承諾して頂き、しかも誠心誠意審査にあたられて、今更乍ら感謝の気持ちでいっぱいです」。

部会長自らが所属していた新制作協会のネットワークをフルに生かした、枠組み作りのための献身的な努力の心情が吐露された文面なので、記述すべきこととして引用した。もっとも、この一筋だけでは地元出身作家以外の現役有力作家による一律単独審査方式を選択するに至った経緯が、見えてこない。

まず市美展会場調達の苦労があった。第4回展までは平市民会館で開催された。しかし多目的ホールとして細分別部屋割りされた当会場は美術展には不便だった。第5回展からは、新設になったいわき市文化センターが会場となった。設置増減自在の専用パネルが完備された新会場は、当時としては画期的だったようだが、応募点数を全展示するには狭すぎて無理があることから、市教育委員会と市美展実行委員との間で「慎重な議論の上」、審査制を導入、入選者のみを陳列することになったものだという。

また審査員を市外部から招聘する経緯については、現いわき美術協会副会長鈴木邦夫氏に以前聴いた事情通の話によれば、菱沼儀先生存命当時、美協展等で地元作家による当番審査制を試みたことがあったが、審査担当者と応募者との人間関係的距離が近すぎ、何かと不具合が生じやすかった経験を踏まえてのこと、というのが実際であったらしい。

種々苦心の成果が市美展当部会の内実となって目覚ましい反映を見せはじめたのは、昭和60年(1985)の第14回展より、会場がいわき市立美術館となり、意欲のはずみがついてからのことといえようか。「ここ数年の間に、今迄あまり知られてなかった新人が登場して来て、新しい可能性が感じられることはよろこばしい現象とおもいます」とは、先に引用した若松光一郎氏の同文中に出てくる言致であった。

しかし、ことは両刃の剣で、応募組の活況に反し、無審査招待組では見るに耐えない停滞、無気力作品の傾向が顕われはじめた。そこで五年前の

第21回展から、18名いた招待作家を、長老格の吉田富美・若松光一郎両氏のみとし、他の16名は一律無鑑査へと編成替えするデノミ的組織改革を断行した。むろん、無審査組の奮起をうながしてのこと。効果はあらわれているのかどうか。

市長賞に25歳の女性美大院生の抽象作品が受賞となった去年、会場で、当作品に「未成熟な一過性のお手軽傾向作品」と辛辣な批評を加えたうえ、このような評価規準が年々猫の眼のように替わる現行の単独審査方式に対する、不信と疑問をぶつける声を耳にした。そして同様の意見を持つ市美展参加者が、決して少なくないらしいことに驚きもした。また、いっそ審査方式そのものを撤廃し、市民の美術の祭典として、出品作全展観が原則のアンデパンダン方式に切り替えるべきではないか、との意見を提唱する向きも出てきている。

ここまで書いてきて、26回目の最高賞を受賞した若者の作品タイトルが「蓄積」であったことに、あらためて気づき、何かしら符合めいたものを感じずにいられない。累々たる蓄積の果てに、のけぞり横たわる“成熟と喪失”の、紙一重の実相を一。

【「美術館ニュース」(1998. 3. 25)」より】

■Voice 新設-市美展 陶芸の部・写真の部によせて

森 大岳 (陶芸の部 部会員)

土・被写体は吾師。今までは自分の掌中でしかなかった作品が、初めて公のまな板上で包丁を入れられた。陶芸・写真いずれも現代美術が最高賞を獲得し、両部門に大きな一石が投げられた。この波紋に流され溺れることなく、これを一つの啓発として受け止め、土・被写体と自己との対話の中に、更に自らを深めていくことが肝要であろう。土・被写体を自己主張のための単なる小道具として軽視してはならず、これらを師と仰ぎ耳を傾け、その内なる声を聴き自己研鑽に精進したい。

野口孝寛 (陶芸の部 部会員)

焼物に限らず、何かをつくるときに大事なのは、どこをみているかなんだと思う。アホだ、生意気だと言われてもいいから自分をみながら遠くをみていたいし、みてほしいと思う。市美展がよどみすぎた水にならないように。

志賀俊恵 (写真の部 部会員)

写真は楽しむ時代である。各クラブの展示会や、コンテストの様に、テーマやノルマ(?)に縛られず、自由な発想で、市美展という御興を誰もが気軽に担げる土壌作りが、長続きの秘訣であり、部会員の役割と考える。

柴田 茂 (写真の部 市長賞受賞者)

私の場合、色々な技法を使い自分のイメージを表現する写真なので、評価されるかどうか不安が有りました。でも今回の受賞で、少し自信ができました。これからも自分が撮りたいもの、表現したいものに拘っていきたいと思います。最後に私の好きな言葉を紹介します。「…レンズを絵筆の代わりに使って自分の絵を書く。それも画家の真似ではなく、レンズでしか描くことの出来ない映像を。…」写真家岡崎達郎氏の言葉です。

【『いわき市美展20年の歩み展』(1991)より】

■いわき市民美術展に就いて

若松光一郎 (絵画・彫塑の部 部会長)

1991年早々に、いわき市民美術展20周年記念展が開催されることになり、皆さんと共に慶びをわかち合い、また、御協力御後援下さいました方々に厚く御礼申し上げます。

20年を迎える「市美展」の歩みを振り返ると、第1回展は平市民会館で、審査員は新制作協会の角浩氏でした。市民会館は多目的なホールなので会場の展示スペース造りに苦労したものです。この市民会館を使用しての開催は4回展迄で、いわき市文化センターが街の中心部Dデパートに隣接して建設され、やっと美術展がひらけるホールが出来上がったのでした。3階の展示場ホールです。文化センターの展示ホールは県内各都市に先がけての誕生で、いわきの美術界に大きな波紋を投げ、影響を与えました。ご存じの様にいわき市民ギャラリーの活動によるヘンリー・ムーア展、ロダン展、クリムト展等の一大イベントを文化センターの展示ホールで開催して注目を浴びたのでした。この文化施設による影響は大きく、県展出品者のいわき勢の好成績をみてもおわかりいただけると思います。

市美展は、その後、文化センターの会場で引き

続いて開催されましたが、会場の壁面の関係上、搬入された全作品を陳列することは不可能で、審査をして入選者のみを陳列せざるを得ませんでした。この件に就いては市教育委員会と市美展実行委員の間で慎重な討議の上で決定され、審査員は地元やいわき出身者以外の、中央画壇で活躍している実力作家の中から一人を選んで依頼し、厳正な審査を行って貰いました。どの審査員も現在画壇の錚々たるメンバーであります。絵画部の場合は審査員のお礼の謝金は予算の関係上、誠に些小でしたが、お願いした方々は心よく承諾して頂き、しかも誠心誠意審査にあたられて、今更乍ら感謝の気持ちでいっぱいです。中には審査が適正であったかどうか考えながらお帰りになられた方もおられ、後日ご丁寧なお手紙送っていただいています。

そして多くの審査員の方々からお世辞でなく、いわき市美展は地方都市の中でもユニークな展覧会であり、活気があるとの好評を得ています。県内はもとより東京近郊の千葉、埼玉、茨城等の市美展の状況を見ても、いわきは決して遜色がなく、むしろ勝っているとも云えるでしょう。私自身も誇りを持って自負しています。

こうした市美展の活動の背景には、実行委員の中に情熱をもってボランティア的な仕事に集中してくれている方々の存在や、行政側の長の文化活動に対する深い理解を挙げることができます。地方に於ける文化活動振興の要点はこの二点につきると思います。

さて、いわき市美展では招待者、無審査、一般出品者を含めて全員が「未発表の新作を出品する」と言うことが規約の中でうたわれています。地方展ではよくあることですが、中央展で一度発表した作品をもう一度地元の展覧会に発表することは、作家としての姿勢がうたがわれ、規約上禁じられています。プロを自任する作家においては尚更で、好ましいことではありません。

審査員の個性の違いもあって、入賞、入選者の選考も年によっては若干異なることもあります。二人の審査員で決めるよりは単独の一人の審査で決めてもらう方が問題もなく、いい方向に進展しているようです。地方の美術文化水準を多少なりとも向上を目ざすには、各自が率先して出品作に全力を傾倒すること、私自身、振り返ってみ

てその感を深くします。

出品作品を会場に並べて見ると、いつものこと乍ら自分の作品がどの様に見えるかが大変気になるものです。案外皆さんは平気な顔していますが、きっと心の中では私と同じではないだろうかと想像しています。私の所属している会の高名なW先生は、ご自分の作品について随分と気になされて、まるで画学生の様子にういういしい情景を見て心うたれたことがあります。

作家は描くことも大事ですが、陳列された作品が皆さんからどの様に評価されているか謙虚に反省してみることも大事です。又、自分の作品が隣りの作品と、どの様に響き合うかも大事なことです。これは陳列委員の永年のカンによるしかありません。そしてセンスの問題もあります。

合唱でハモルと云う音楽用語がありますが、会場全体の調子がバランスよく響き合うことです。これは展覧会場の雰囲気づくりに欠かせない大事なことと思われまふ。年々大作の出品が多くなるので、陳列は前年度のコピーを参考にして慎重な配慮をもって行うべきです。

文化センターの会場から待望の市立美術館の会場に移ったのは6年前の第14回展からで、市美展に寄せる市民の関心が一層深くなりました。ここ数年の間に今迄あまり知られてなかった新人が登場して来て、新しい可能性が感じられることはよろこばしい現象と思います。これも開館7年目を迎える市立美術館の収蔵作品からの影響が、暗黙のうちに浸透している様に思われてなりません。20周年の記念展を迎えてますます勇気ある可能性に挑戦される様に切に望みます。

■15年を振り返って 佐々木折柴（書の部 部会長）

いわき市美展への書の初参加が昭和50年だから、実際のところ本年度で15回となる。最初の事情については、記憶が曖昧模糊として定かでない。次のような経緯だったと思う。

確か教育委員会の要請で、依頼がきた。当時私の知る範囲では、大概の都市の美術展に書が入っていた。私は以前から書の部のないのは片手落ちと決めこんでいたので、拒否する理由は何もなく。しかし私一人では所詮決め兼ねていたので、県展の招待作家であった村上皓南・線引千斎・

田久奇峰の三先生に相談を乞うた。快く各先生の賛意をえたので、受諾にふみきった。

昭和50年の6月だったか、私共4人が創設世話人として最初の打合せが行われた。丁度この年を機に、会場を平市民会館からいわき市文化センターへ移動するという事態もあって、運営面で大分の変更があった。

絵画の部は別として、書の方は何も彼もが新規からの出発である。審査員、招待作家、実行委員、賞、作品寸法などが審議された。その後2、3回会合がもたれ、諸事につき決定をみた。

まず審査員は創設世話人のメンバー、招待は前者4人に県展の委嘱作家であった後藤桂仙・酒井泰舟・田辺追牛・鈴木胡秀・小野寺峰堂・石川葎の6氏が加わった。実行委員は出品予定者から、80名ほど選んだのではなかったか。賞の授与数は絵画の部と同じで、ただ書の部として独自に、(1)市長賞2回、(2)市長賞1回に市議長賞か市教育長賞2回、(3)市議長賞か市教育長賞4回のいずれかに該当すれば招待に昇進という規格を定めた。別に県展の委嘱者は、招待になる事項も付け加えた。作品寸法は7,200cm²以内とした。

会場だが、文化センターの2階の大会議室と会議室を予定しておったが、小講義室まで用意するに到った。出品総数が168点と、予想以上の数に及んだからである。パネルの不足は、市民会館から借用することにした。そんなこんなで、漸く10月の開催にこぎつけ実現をみた。

肝心の作品の内容は、どうであったか。確言できるまでの根拠はいま持合せないが、大意として技巧だけに走り、体当たりの熱気にあふれた作が少なかったと察する。この点は私の審査評で強調した要所だったが、道理は道理として一面止むをえない現実でもあったのである。

最近になってこそ、展覧会の隆盛と称すか、逆に氾濫とまでうとまれているが、その頃は展覧会はあったにしても中央に集中して、地方では少なかった。地方の書の愛好者は、競書雑誌を主に投書によって覇を競いあった趣向が強い。よって半紙などの、ごく小さな内枠だけのものがきに終始してしまう。会場芸術としての大作主義に馴れず、ここに戸惑いをみる。一方づいた認識にもよろうが、全力で制作にあたる情熱は望むべくもなかった。

回を重ねて、作品寸法は10,800cm²と大きくなり、一つの前進をみたのだが、半折の形式が曲物である。条幅というタテ140cm・ヨコ35cmをさし、一定の形の類型化が生じてくる。寸法に制約があるので、特徴なくありふれた表現方法になる恐れが出、それがつまらない結果をきたす。しかし考え直せば、型に則っての学習が上達の早道となるとするならば、人により千種万様で押し並べて悪いとはいきれなくなる。

質の面はどうか。師弟関係の深い絆の書の世界にあって、師風を追従することによって師と門下生との作が類似するのは止むをえない現象かも知れぬが、手段を講じて打開しなければならぬ。といて即刻に個性を打出し、自己の書を創造できるか。そこが絵画と違って、難題なところである。

第1回からの願望だが、市美展へ誰でも気楽に参加し、魅力の場をつくり、輪を広げてゆく。換言するなら、底辺の拡大を図るわけであるから、高飛車に典型的とか、同一風で次元が低いと貶すのはどうかと考える。各人技量が備わり正しい審美眼がついてくれば、自然とこの問題は解決がつく。過去の市美展を通し、こんな感懐を深く抱いた。

これまで進歩成長した人もあれば旧態依然の人もあり、脱落した人もあった。これは15回という歴史が如実に物語っており、隠し立てのできぬところであろう。各人各様いろいろな事の次第がからんでのことだから、説論する気持はないが、挫折してしまっは元も子もない。書の深奥を探知し、書へかける執念を大切に持ち続けることではないか。

全国的な傾向だが、当いわき市も若い人の書の嗜好が減っている。原因は時代の風潮と見なせられるが、このまま黙認しておくわけにはゆかない。市美展の内容の高さと充実を図るのは勿論だが、若い人達の導入というか誘い、これを我々の責務としてどう善処すべきか、将来への第一の目途としなければならないと思う。

いわき市美展50年の歩み

編集・発行 いわき市立美術館

印刷 (株)ネクスト情報はましん

©いわき市立美術館 2021

点

応募点数

250

200

150

100

50

0

1
一九七
一
(市民会館)

2

3

4

5
(文化センター)

6

7

8

9

10

11
一九八
一

12

13

14
(美術館)

15

16

17

18

19

20
一九九
一

21

22

23

24

25

